

Title	隣松寺蔵『久祥院殿写経』（仮名書き法華経）をめぐ る一考察 - 付【翻刻】隣松寺蔵『久祥院殿写経』第 一冊（序品第一・方便品第二） -
Author(s)	渡辺，麻里子
Citation	人文社会科学論叢，3，L1-L35，2017
Issue Date	2017-08-31
URL	http://hdl.handle.net/10129/6134
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

隣松寺蔵『久祥院殿写経』（仮名書き法華経）をめぐる一考察

—付【翻刻】隣松寺蔵『久祥院殿写経』第一冊（序品第一・方便品第二）—

渡 辺 麻里子

- 一、はじめに
- 二、『久祥院殿写経』概要
- （一）書誌
- （二）本文の特徴
- 三、『久祥院殿写経』と仮名書き法華経の分類
- 四、久祥院について
- 五、久祥院をめぐる人々—津軽信義とその妻たち—
- 六、『久祥院殿写経』の書写奉納
- 七、おわりに

一、はじめに

青森県の津軽地域には古くから仏教が盛行し、豊かな仏教文化が展開した。そこで現在も、数多くの仏教美術の名品が伝えられ

ている。本稿では、弘前市立博物館に展示されている青森県重要文化財『久祥院殿写経』（隣松寺蔵）に注目し、その特徴や意義について考察するものである。

また『法華経』は、日本文化に大きな影響を与えた。『法華経』の享受を考える上で、仮名書き法華経は重要な資料である。そのため仏教学や国語学の見地から、多くの研究がなされてきた。⁽¹⁾

『久祥院殿写経』は、『法華経』二十八品を音読みの仮名書きで書写した全八冊の折本である。書名の「久祥院」は、弘前藩三代藩主信義の室であり、四代藩主信政の母である人の名で、本書は久祥院が隣松寺（青森県弘前市）に書写奉納したものと伝えられている。⁽²⁾『法華経』写経の現存例は数多くあり、また仮名書きのものも知られているが、音読みによる仮名書き写経は例が少なく貴重である。また久祥院の直筆とすれば、女性の手による筆写本としても注目される。

『久祥院殿写経』は、青森県の「重宝」として昭和三十年に指定され、青森県内では著名なものであるが、管見の限り、『法華経』写経や仮名書き法華経等の研究で取り上げられたことはないようである。

まず隣松寺蔵『久祥院殿写経』について、これまでどのような紹介されてきたか、確認しておきたい。

『青森県の文化財』の「久祥院殿写経」の項には、「県重宝／所有者 隣松寺（江戸時代中期）昭和三〇年一月七日、指定」として、以下のように解説する。

久祥院は津軽三代藩主信義の側室、才色兼備の女性とたえられ、元禄五年（一六九二）四月四日、六十三歳で没した。

四代藩主信政の生母で幼名とく、のち予曾、通称久祥院、とくに菊花を愛したので菊御前といわれた。酒に乱れる夫信義をいさめ、名君といわれる信政を育て、武芸の心得もあり、和歌に長じ、琴、活花、茶の湯などにすぐれて、書をよくした。

この写経は、妙法蓮華経八巻を鳥の子紙（和紙の上質紙、鳥の子色の紙の意、淡黄色）に浄書したもので、折本八冊、かな書きであるところにその特徴がみられる。書跡は筆跡そのものも見事であるが、作者の優れた風格に接することが出来るので価値が高い。

久祥院は生前仏道に深く帰依していた。写経は延宝六年（二六七八）四月八日隣松寺へ奉納された。隣松寺は久祥院の生家多田家の菩提寺で、久祥院の墓所もある。多田家の先祖は三ツ目内の多田玄蕃である。

元禄年間、藩主信政が寄進した「久祥院殿位牌堂」は県重宝に指定されている。

奉納した久祥院や、原本の装丁などについての解説に加え、「かな書きであるところにその特徴がみられる」と指摘している。本稿では、特にこの「仮名書き」に注目して考察する。なお稿末に『久祥院殿写経』全八冊のうち、第一冊の翻刻を付したので参照いただきたい。

二、『久祥院殿写経』概要

（一）書誌

隣松寺蔵『久祥院殿写経』は、現在、弘前市立博物館に寄託され、常設展示されている。二〇〇七年一月一九日と、二〇一五年六月二六日の二回、弘前市立博物館において調査をさせていた。最初に、書誌情報を説明する。

『久祥院殿写経』は、黒漆に金泥で蓮華等花絵柄の蒔絵が施された木製の箱に収められている（稿末・写真3参照）。箱の上部には金具の取っ手が付されている。全体に美しい豪華なしつらいである。箱の寸法は、縦二〇・五×横一四・五、奥行が一八・〇糎である。左右に四帖ずつを納め、引き出すようになっていた。箱書などは一切ない。

『法華経』は、全八冊。折帖の冊子である（写真1・2）。寸法は、縦一六・五×横六・一糎の小冊である。表紙は布地で、薄香色地に金糸の花絵柄が織られている。題箋は、金色押格子網目の料紙

で、縦一〇・七×横一・八糎に墨書で外題が「妙法蓮華經^{第二(八)}」と墨書される(写真1)。

紙数は、第一冊(以下①と表記する)九、②一〇、③一一、④一〇、⑤九、⑥九、⑦九、⑧七紙で、それぞれの長さは、稿末の付表にまとめた。丁数は、①六三、②六八、③六七、④五八、⑤六二、⑥六二、⑦五三、⑧四五折となっている。料紙は鳥の子紙の打紙で、雲英入りである。本の天地(上下)は、各冊共に金色に装飾されているなど、豪華で美しい装訂である。

一面行数は六行で、界線がある。界線は銀泥で、天界が一・七、界高が一二・九、地界が一・七、界幅が一・〇糎である⁶⁾。

書入は、注記などは無く、句点(朱)、見出点(朱)がある。偈頌(韻文)の部分は、句ごとに一字をあけて句を区切り、散文の部分は朱で句点「。」を入れる。また文章と偈の区切りには、朱の見出点(〇と、三点)が文の冒頭に記される。

その他、書き損じによると思われる修正・訂正が随所にある。墨書を削り白く塗った上に墨で新たに書き直している。例えば、第一冊五三丁裏第一行め「しやくどじやうめつ」の「め」の字は、もとの字を削って書き直している。

内題は、各冊、以下の通りとなっている。第二冊から第八冊は、内題下に、冊数が記される。

- ① 妙法蓮華經じよほんだい一
- ② 妙法蓮華經ひゆほんだい三
- ③ 妙法蓮華經やくさうゆほんだい五
- ④ 妙法蓮華經五百でしじゆきほんだい八
- ⑤ 妙法蓮華經だいたつたほんだい十二
- ⑥ 妙法蓮華經によらいじゆりやうほんだい十六
- ⑦ 妙法蓮華經じやうふきやうぼさつほんだい二十
- ⑧ 妙法蓮華經くはんせをんぼさつふもんぼんたい廿五

また尾題が冊ごとにより(巻末(品末)にはなし)、「妙法蓮華經卷第一(八)終」と記される。なお、外題・内題・尾題に「妙法蓮華經」とはあるが、『久祥院殿写経』の名称は、本や箱に、記されていない。

奥書はどの冊にもなく、書写年代・筆写者について、原本からは確認できない。

【付表】『久祥院殿写経』の寸法 (単位 cm)

紙数	第1紙	第2紙	第3紙	第4紙	第5紙	第6紙	第7紙	第8紙	第9紙	第10紙	第11紙	計
第一冊	85・3	91・0	90・7	90・8	90・9	90・9	90・8	90・8	34・5			755・7
第二冊	44・4	91・0	91・0	91・0	90・6	79・4	82・8	77・8	90・9	77・5	4・1	816・4
第三冊	83・8	91・1	91・2	91・2	79・2	91・1	90・9	91・2	8・1	83・1		805・0
第四冊	75・2	91・2	43・9	23・2	91・0	91・2	91・0	87・9	22・7	12・4		696・7
第五冊	84・1	91・2	91・1	91・0	91・0	91・0	91・0	91・0	30・1			743・8
第六冊	89・3	85・0	85・1	91・0	90・9	91・2	91・2	91・1	30・1			744・9
第七冊	49・1	91・6	89・0	90・9	91・0	87・7	70・8	62・4	3・6			636・1
第八冊	63・4	91・1	91・1	91・0	90・9	90・7	22・2					540・4

(2) 本文の特徴

『久祥院殿写経』の本文を具体的に確認してみたい。以下に、第一冊の冒頭を載せる(写真2)。

妙法蓮華経じよほんだい一

によぜがもん。一じぶつちう。わうしやじやう。ぎ
しやくつせんちう。よだいびくしゆ。まん二せん
にん。かいぜあらかん。しよろいじん。むぶほん
なう。たいとくこり。じんしようけつ。しんとくじざい。

ごみやうわつ。あにやけうぢんによ。まかかせう。『(一オ)

うるびんらかせう。がやかせう。なだいかせう。しや

りほつ。だいもくけんれん。まかかせんゑん。あぬるだ。

こうひんな。けうぼんはだ。りはだ。ひつりやうかば

しや。はくら。まかくちら。なんだ。そんだらなんだ。

ふるな。みたらにし。しゆほだ。あなん。らごら。によ

ぜしゆ。しよちしき。だいあらかんとう。ぶうかく 『(一ウ)

むがく。二せんにん。まかはじやほだ。いびくに。よけん

ぞく六せんにんく。らごらも。やしゆたらびくに。

やくよけんぞく。ぼさつまかさつ。八まんにん。かいお

あのかたら。三みやくさんほだ。ふたいてん。(以下略)

右の本文は、第一冊冒頭の一丁と数行の翻刻である。経名の五文字「妙法蓮華経」を漢字で記した後、連綿の平仮名で記される。

「一じ(一時)」「二せんにんく(二千人俱)」「三みやく(三藐)」の

ように、数字のみを漢字で表記し、あとの文字を音読みして平仮名で表記している。数字の表記は、右の箇所にはないが、「一」「十」の他、「百千けんぞくく(百千眷属俱)」など、「百」「千」も漢字表記される。

しかし漢数字の箇所の全てを漢字で表記しているということでもない。傍線部「三みやくさんほだ(三藐三菩提)」の例では、「三みやく(三藐)」は漢数字を使用するが、「さんほだ(三菩提)」は「三」を平仮名表記している。このような漢数字表記の違いは、全体を見る限り、特段の区別をしているものではないようである。読み方の例をいくつか示しておく、以下の通りである。

「耆闍崛山中」↓「ぎしやくつせんちう」

「其名曰」↓「ごみやうわつ」

「羅睺羅母」↓「らごらも」

「楽説弁才」↓「げうぜつべんざい」

「善人仏慧」↓「ぜんにうぶつゑ」

「宝月菩薩」↓「ほうぐはつぼさつ」

「月光菩薩」↓「ぐはつくはうぼさつ」

「満月菩薩」↓「まんぐはつぼさつ」

なお、当該箇所の『法華経』本文とその訓読文は、以下の通りである。

妙法蓮華経序品第一

如是我聞。一時仏住。王舎城。耆闍崛山中。与大比丘衆。万二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已尽。無復煩惱。逮得己利。尽諸有結。心得自在。其名曰。阿若憍陳如。摩訶迦葉。優樓頻

螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。摩訶迦旃延。阿菟樓駄。却賓那。憍梵波提。離婆多。畢陵伽婆蹉。薄拘羅。摩訶拘絺羅。難陀。孫陀羅難陀。富樓那彌多羅尼子。須菩提。阿難。羅睺羅。如是衆所知識。大阿羅漢等。復有學無學二千人。摩訶波闍破提比丘尼。与眷属六千人俱。羅睺羅母。耶輸陀羅尼比丘尼。亦与眷属俱。菩薩摩訶薩八万人。皆於阿耨多羅三藐三菩提。不退轉。⁽⁷⁾

是の如く我れ聞けり。一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したもう。大比丘衆万二千人と俱なり。皆な是れ阿羅漢なり。諸漏已に尽くして、復た煩惱無く、己利を逮得し、諸もろの有結を尽くして、心に自在を得たり。其の名を、阿若憍陳如・摩訶迦葉・優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・摩訶迦旃延・阿菟樓駄・却賓那・梵波提・離婆多・畢陵伽婆蹉・薄拘羅・摩訶拘絺羅・難陀・孫陀羅難陀・富樓那彌多羅尼子・須菩提・阿難・羅睺羅と曰う。是くの如き衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。復た学、無学の二千人有り。摩訶波闍破提比丘尼、眷属六千人と俱なり。羅睺羅の母、耶輸陀羅尼比丘尼、亦た眷属と俱なり。菩薩摩訶薩八万人あり。皆な阿耨多羅三藐三菩提に於いて、退轉せず。⁽⁸⁾

漢訳の『法華経』について、音読み表記していることが確かめられる。

ところで、『法華経』の読み方について、冒頭の「如是我聞」を音読みすれば「ニョゼガモン」、訓読みすれば「是の如く我れ聞け

り(かくのごとくわれきけり)」となる。訓読み(=訓読)の仕方には種々あることが問題とされてきた。これまでの研究で知られる仮名書き法華経から、その例をあげてみよう。

まず、足利本『仮名書き法華経』では次のように記される。

妙法蓮華経序品第一

かくのごときことを、われ、きゝたまゑりき。ひとゝき、ほとけ、王舎城耆闍崛山のなかに住したまゑりき。大比丘衆万二千人ともなりき。みな、これあらかんなり。ろすてにつくして、またほんなうなし。こりをたいとくせり。諸有のけつをつくして、心、しさひをゑたり。そのなをは、あにやけうちんによ・まかかせう・うるひんらかせう・かやかせう・なたいかせう・舍利弗・大もくけむれん・まかかせんゑん・あぬるた・こうひんな・けうほんはたい・りはた・ひつりようかはしゃ・はくら・まかくちら・なんと・そむたらなした・ふるな・やく王菩薩(以下略)⁽⁹⁾

冒頭の「如是我聞」は「かくのごときことを、われ、きゝたまゑりき。」と読み、「皆是阿羅漢。」は「みな、これあらかんなり。」「心得自在」は、「心、しさひをゑたり。」と読んでいる。

次に、西来寺本『仮名書き法華経』である。

妙法蓮華経序品第一

かくのごときことを、われ、きゝたまゑりき。ひとゝき、ほとけ、王舎城・耆闍崛山のなかに住したまゑりき。大比丘衆

万二千人と、もなり。みなこれ阿羅漢なり。諸漏すでにつくしてまた煩惱なし。己利を速得せり。諸有の結をつくして、こゝろ、自在をえたり。そのなをば、阿若阿若憍陳如・摩訶迦葉・(中略)かくのときは、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。また学・無学、二千人あり。摩訶波闍波大比丘尼、眷属六千人ともなりき。¹⁰⁾

足利本と似た読み方をしているが、熟語や人名、固有名詞などの表記は、もとの漢字表記を活かしている。冒頭の「如是我聞」は「かくのごときことを、われ、きゝたまへりき。」とし、「皆是阿羅漢。」は「みなこれ阿羅漢なり。」「心得自在」は、「こゝろ、自在をえたり。」と記している。

このように、「仮名書き法華経」と言う場合、多くは、訓読みしたものを仮名書きしたものを指している。また全体を「平仮名書き」をするのではなく、漢字表記を併用しつつ、訓読させたものも指す。それに対して『久祥院殿写経』は、音読みでの仮名書きであり、冒頭の経名と本文中の数字のみを漢字表記している点が、大きな特徴である。

三、『久祥院殿写経』と仮名書き法華経の分類

仮名書き法華経を論じた研究は数多くあるが、その中で、音読みの仮名書き法華経について論じて注目されるのは、兜木正亨氏の研究である。兜木正亨『法華版経の研究』では「仮名本法華経」の分類が行われている。その中に「音よみ仮名本」と「訓よみ仮

名本」の分類が示され、「音よみ仮名本」についての言及がある。その箇所を以下に引用する。

この二種類の仮名本の中、音よみ本は、いくらかでも漢字に通じている人であれば、全くの仮名ばかりのものより、漢字のかたわらに仮名をふった、仮名つきの本の本が、むしろ便利である。仮名ばかりの音よみ本は、実用にはかえって骨の折れることが多い。このためか、仮名本には、音よみ仮名本が訓よみ本に比べて、数が少ない。その少ない中にも、版経の音よみ仮名本が行われているのであるから、相当数の要求があったにちがいないとおもわれる。

音よみ仮名本の版本は、江戸初期の開版とみられるもので、六行折本仕立ての八巻本大版経である。この仮名本は題字の妙法蓮華経の五字だけが漢字で書かれているだけで、そのほかは、ことごとく平仮名である。

兜木氏は、音読みの仮名書きは少数であること、その中で版本になっているものがあること、つまり版本の『法華経』で音よみ表記をしているものがあること、版本の音読み仮名書き法華経は、六行折本の八巻本大版経であること、その表記は題字の「妙法蓮華経」の五字だけが漢字で、その他の文字は全て平仮名を用いていることなどを指摘している。

「音よみ仮名本」の例として紹介されている版経法華経について、比較のため、以下に本文を示してみたい。

妙法蓮華經じよほん。だいいち

によぜがもん。いちじぶつぢう。わうしやじやう。ぎしやく
つせんぢう。よ

だいびくしゆ。まんにせんにく。かいぜあらかん。しよるい
じん。むぶほんなう。だいとくこり。じんしようけつ。しん
とくじざい。¹¹⁾

本文を音読みし、平仮名で表記したものであることが、一見してわかる。本文はすべて平仮名である。漢訳本の経典は一般に一行十七字語を規格にするが、この版経の仮名書きは、改行を漢文經典の十七字に合わせているとのことである。右の記載は、原本通りなのだが、仮名書きにすると、一行字数が区々になるところを、天地を揃え、字詰めを調整することによって、一行漢字十七字分の内容に合わせて改行しているとのことである。

『久祥院殿写経』と比較してみると、『久祥院殿写経』は、改行について、全くこれと一致しない。『久祥院殿写経』の本文は、偈頌と散文の切り替え部以外は、送り込みながら記されていて、漢訳本の場合の十七字揃えには全く関係ない。また表記についてであるが、「一」など、数字についてのみ漢字を使用している点で、版経の音よみ法華経の全文平仮名書きとは異なる種類のものであることが確認できる。

(7) 先行研究で指摘されている「音読み仮名書き法華経」は、兜木氏の紹介したような版本の法華経に多く見られるものである。『久祥院殿写経』のような、音読みで仮名書き（ただし漢数字のみ漢字表記）という形式での「音読み仮名書き法華経」で、かつ写本

であるものについては、管見の限り類例を見出せない。今後、さらなる調査を行っていきたい。

次に、仮名書き法華経について論じた数多い研究の中で、様々な仮名書き法華経を分類して論じた野沢勝夫氏の研究に注目する。野沢勝夫「訓経に非ざる「仮名書き法華経」について」¹²⁾では、いわゆる訓読仮名書きの仮名書き法華経とは異なる仮名書き法華経に注目し、以下の様に分類が示される（番号は筆者が付した）。

- | |
|---|
| I 訓経（訓読したもの）
① いわゆる「仮名書き法華経」
② 「翻訳仮名書き法華経」
③ 「簡約仮名書き法華経」
II 表音的な表記をしたもの |
|---|

「訓経」つまり「訓読したもの（経）」として、① いわゆる「仮名書き法華経」と、② 「翻訳仮名書き法華経」と、③ 「簡約仮名書き法華経」の三種に大別し、訓読の経にも、①のいわゆる訓読の仮名書き法華経とは異なるものがあることが論じられる。

①～③をそれぞれ確認しておこう。①のいわゆる「仮名書き法華経」は、「訓経で、漢文原典の逐語的な訓読を、仮名交じりの和文に延べ書きしたもの」と説明される。前述した、足利本や西来寺本などがこの例である。野沢氏は、現存する「仮名書き法華経」（訓経で、一品以上まとまって存するもの）として、以下の六種を指摘する。¹³⁾

- ① 矢代本
- ② 瑞光寺本仮名書き法華經
- ③ 天理図書館本仮名書き法華經
- ④ 妙一記念館本仮名書き法華經
- ⑤ 足利本仮名書き法華經
- ⑥ 守屋本仮名書き法華經

通常「仮名書き法華經」として想起するのは、これらのような訓經の仮名書き法華經であるが、同じ平仮名書きでもこれらとは異なるタイプとして、②「翻訳仮名書き法華經」を挙げる。これは、女性のために完全なる和文で作成したもので、「翻訳」と言うように、和訳（現代語訳）に近いものである。

②「翻訳仮名書き法華經」の例として、伝西行筆「仮名書き法華經切れ」が紹介されている。

かのよのなかにあるとこ(ろ)の□□を、みな、からとりあつめ

てこまかにくたきて、すゝりのすみにつくりて、そのすみをすりて、ひむかしさま二千のくにをすきて、ひとつのしるしをつけてんむとす。そのしるしのおほきさひ(と)

のあしのかげにまかひてみゆるちりひとつかおほきさなり又千のくにをすきて又ひとつのしるしをつくかくのことく千のくにをすきつゝしるしをつく□むほとにそのつちしてつくりたりつるすみなつき

はてなむほと、いかはかりありなむとおまへにさふらふ人々¹⁴⁾

この『法華經』（漢文）の該当箇所は以下の通りである。

譬如三千大千世界。所有地種。假使有人。磨以為墨。過於東方千国土。乃下一点。大如微塵。又過千国土。復下一点。如是展轉。尽地種墨。於汝等意云何¹⁵⁾

このように、単なる訓読ではなく、漢文を離れて和訳を行い、わかりやすい文章に直して表記していることがわかる。

次に②「翻訳仮名書き法華經」とも違い、さらに漢文の本文を離れていくものに、③「簡約仮名書き法華經」を挙げる。これは、經典内容を庶衆に解り易く伝えるために、「訓經」を改変・要約し、絵巻中で、詞書きとして使用するなどしているものである。③「簡約仮名書き法華經」の例として、野沢氏は畠山記念館蔵『法華經』を挙げる。以下に、如来神力品第二十一の一部を示す。

その時に仏つてのたまはく若我この神力をもて無量阿僧祇劫不囑せんかために此經の功德をとくとも猶つくす事あたはし要をとりてこれをいふに如来の

一切の所有の法如来の一切自在神力如来の一切の秘藏のくら如来一切の甚深の事みな此經にときあらはす經卷のあらん所もしはその(以下略)

この部分の『法華経』の該当箇所は以下の通りである。

爾時仏告上行等菩薩大衆。諸仏神力如は無量義無辺不可思議。若我以是神力。於無量無辺百千万億阿僧祇劫。為囑累故。説此経功德。猶不能尽以要言之如来一切所有之法。如来一切自在神力。如来一切秘要之藏。如来一甚深之事皆。於此
経示顕説是故(以下略)

本文に即しての説明ではなく、簡略化し、概要をまとめて述べていることがわかる。こうした概要文を、絵巻の詞書に使用していく例もあるとのことであった。

以上のように、訓経にも種々あることを確認したが、その反対に、「Ⅱ表音的な表記をしたもの」があると、音読みの経が位置づけられた。この表音的な表記をしたものの具体例は、詳しく論じられていないが、中世の遺存資料の中には、表音的な表記(字音の仮名書きや同音異字の多用など)の目立つものがあると指摘する。字音による仮名書きに、『久祥院殿写経』は該当するが、本書について、特段の指摘はなされていない。

以上、先行研究における仮名書き法華経の分類を確認してみた。その中で、『久祥院殿写経』は、音読みの仮名書きで、経名と一部の数字のみ漢字を用い、その他を平仮名表記した写本であり、どの分類にも該当しないことが確認できた。

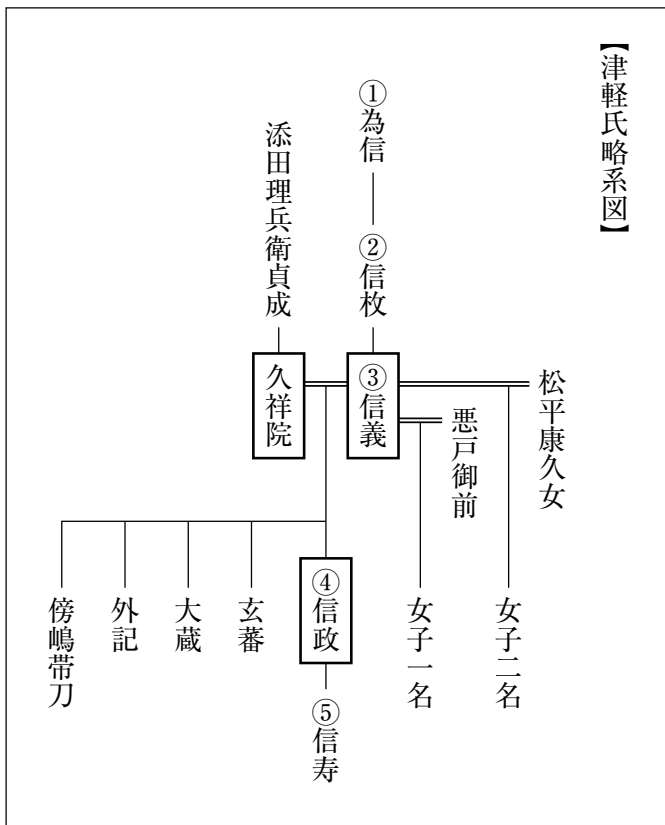
(9) 『久祥院殿写経』の音読みについて、読み方の特徴や、依拠した法華経本文について、まだ十分に精査できていない。今後さらに調査を進めていきたい。

四、久祥院について

ここまで、『久祥院殿写経』の本や内容を検討してきたが、ここからは、『久祥院殿写経』の書写奉納に関する外部徴証について確認していきたい。まず、書写奉納者と伝えられる「久祥院」について検討する。

久祥院とは、弘前藩三代藩主信義の側室で、四代藩主信政の生母のことである。寛永七年(一六三〇)に生まれ、元禄五年(一六九二)に六十三歳で亡くなった。幼名を「とく」、のちに「予曾」と言い、「久祥院」と通称した。また菊花を愛したために「菊御前」との通名もある。

【津軽氏略系図】



この久祥院の出自については、二説の記述が見られる。¹⁶⁾

- ① 添田理兵衛貞成の女。名を与會といい、のちに久祥院と称す。
 ② 唐牛九右衛門の女。父が浪人していたため、娘婿であった添田理兵衛の女として側室になった。

①の「添田理兵衛貞成の女」とする説は、津軽承昭編纂『津軽藩旧記類』の続編『津軽藩旧記伝類』巻之二などに記される。以下に、『津軽藩旧記伝類』巻之二に記載される「久祥院」の記事を示す。

久祥院名阿与會、
又阿徳、信義公の御部屋にして、信政公の御生母なり。

津軽玄蕃、津軽大藏、
傍島帯刀も御同腹なり。添田理兵衛女にて、儀左衛門貞俊の姉なり。中々

凡人に勝りて発明器量ありけれハ、信義公の奥女中となりしなり。

これによれば、久祥院は添田理兵衛の女で、添田儀左衛門貞俊の姉である。賢く容姿も美しかったために、信義の奥女中に取り立てられたという。

一方、②の「唐牛九右衛門の女」とするものは、本当は「唐牛九右衛門」の女子だが、事情があつて添田理兵衛の女子としたという説である。この説は、『奥富士物語』や『津軽編覧日記』明暦元年（一六五五）十一月二十五日条の、津軽信義が逝去した記事に添えられた、側室たちに関する記述に見える。以下、②の「唐牛九右衛門の女」とする説を確認してみよう。

まず、『奥富士物語』に見える記事からである。

国母久祥院元禄五壬申四月四日御遠行被遊と也、伝云、女主は実は唐牛九右衛門尉源某始之所、父先年御暇之砌、叔母婿添田理兵衛源定成に被養、¹⁷⁾

これによると、父の唐牛九右衛門が暇を出されていたために、叔母婿である添田理兵衛源定成（貞成）に養われていたという。また『津軽編覧日記』には次のように詳述される。

信義公御妾

① 久祥院殿華岳良栄姉 元禄五壬申年四月四日

久祥院様には添田儀左衛門先祖理兵衛娘の由申伝候は非也、唐牛甚右衛門喜治妹なり、則甚右衛門由緒左に記之、
 一、甚右衛門先祖は多田玄蕃とて、御当地三ツ目内に搔上所持住居致候処、右於搔上討死、二代目多田修理三ツ目内搔上にて三千石領地の処、為信公御代三ツ目内没落の節、右修理浅瀬石へ引退、姉智千徳大和方に罷有候処、浅瀬石没落の刻、討死、右之通本文に有之候得共、玄蕃落城は慶長五年なり、大和藩城は慶長二年也、本文書誤なるべき歟。其子唐牛九右衛門修理討死の砌南部へ忍落、其後御当地へ帰国致罷有候処、信牧公御代被召出、信義公御代まで段々御取立、知行九百石拝領、御児小姓頭、御徒頭兼役被仰付相勤、御近習御用御勤候処、支配の御小兒小姓無調法の儀有之、九右衛門知行被召上、永之御暇被下置、正保二年六月廿八日病死、其子唐牛甚右衛門信政公御代被召出、段々御取立、知行三百石被下置、御用人被仰付相勤、貞享三年五月十三日病死す、右甚右衛門妹親九右衛

門永之御暇被下置候御、添田理兵衛儀は叔母舅故理兵衛方へ差遣、理兵衛娘分に致し、信義公御代御次女中に差上候処、段々御誕生^{取立}御側女中に被仰付、此御腹に信政公御誕生被遊、其外玄蕃・大蔵・外記・傍嶋帶刀以上五人御出生なり、信政公御実母様故分て御太切に被遊し也、御逝去の節火葬ニし奉る、此節信政公より隣松寺へ寺領百石御寄附にて、隣松寺へ葬り奉る、甚右衛門子同甚右衛門、信政公御代段々御取立、知行三百石被下置、是又御用人被仰付、其子八郎左衛門三百石無相違被下置、御手廻相勤候処、享保六年無調法の儀有之、知行被召上、永之御暇被下候処、享保十年十月召出、七人扶持被下置、御馬廻格被仰付、其子甚右衛門跡式七人扶持被下置相勤候処、明和元年三月十五日三人扶持御加増被下置、安永二年正月、五人扶持御加増、都合十五人扶持被下置候、久祥院様御実方右の通なりと云々、

これによると、傍線部①に見えるように、久祥院が添田儀左衛門先祖理兵衛の娘だというのは誤りで、実は唐牛甚右衛門喜治の妹であるとする。その唐牛甚右衛門についても詳しく述べる。

甚右衛門の先祖は多田玄蕃という、御当地三ツ目内に住する者であった。多田玄蕃が討死し、二代目の多田修理も三ツ目内搔上に三千石の領地を得ていた。しかし為信公の御代に三ツ目内が没落した折、右修理は浅瀬石へ引退し、姉舅の千徳大和のもとに身を寄せていたが、浅瀬石が没落の折に討死した。なおこの記事にはさらに付注があり、玄蕃落城は慶長五年であり、大和の落城は慶長二年であって先後関係がおかしく、書き誤りではないかと指

摘している。

さてその子は、唐牛九右衛門修理が討死した際に南部へ忍んで落ち、その後に当地へ帰国したところ、二代信杖によって召し出された。三代信義の代に至るまでに次第に取り立ててもらい、知行九百石を拝領し、御児小姓頭、御徒頭などを命じられてお仕えし、御近習としての御用を勤めた。その子は無調法で九右衛門は召し上げてもらうものの暇を出され、正保二年六月廿八日病死した。その子の唐牛甚右衛門は、信政の代に召し出され、次第に取り立ててもらい、知行三百石をいただき、御用人として勤め、貞享三年五月十三日に病死した。

傍線部②は、久祥院が女中に出る段である。折しも甚右衛門の妹親の九右衛門は暇を出されていたために、叔母の婿であった添田理兵衛の養女となった。添田理兵衛の娘として信義の代に御次女中として差し上げたところ、次第に取り立てられて御側女中まで命じられるようになった。そして四代信政がご誕生となり、この御子の他にも玄蕃・大蔵・外記・傍嶋帶刀と、合計五人の御子を出産した。四代藩主信政の実母となったため大変大事にされ、亡くなった際にも火葬とされた。このように久祥院が女中に出る際に養女になったことや、その後の寵愛と厚遇が記される。

久祥院は隣松寺に葬られるが、その際に信政から隣松寺へ寺領百石が寄附された。甚右衛門も、その子の同じく甚右衛門もまた、信政に取り立てられ、知行三百石を頂戴し、御用人となった。その子の八郎左衛門も三百石を頂戴し、御手廻を勤めた。享保六年に無調法あり、知行は召し上げられて失職するが、享保十年十月に再び召し出され、七人扶持となる。御馬廻格が命じられ、そ

の子甚右衛門も七人扶持となって勤めた。明和元年三月十五日には三人扶持が増え、安永二年正月にはさらに五人扶持が増えとなり、合計十五人扶持となった。久祥院の実家方の事情を、以上のように伝えている。

以上、久祥院の実父は唐牛九右衛門であったが、失職中のために添田理兵衛の娘となって女中として奉公し、女中勤めをしている間に信義に寵愛され、御子を五人も設けたこと、御子が次代藩主となり藩主の母となったため、実家の唐牛の家も取り立てられることとなったことなどが詳細に述べられている。久祥院が藩主の母となった後の唐牛家の厚遇などの記事からも、久祥院の出自はこの記事に従うのが良いものと考えられる。

五、久祥院をめぐる人々―津軽信義とその妻たち―

『津軽編覧日記』には、三代藩主津軽信義の記事と合わせて他の妻たちについての記述がある。信義と久祥院の関係を知らするためにも、他の妻たちの記事についても確認しておきたい。

まず初めに、『津軽編覧日記』二、明暦元年（一六五五）十一月二十五日条の信義逝去の記事から見よう。

一、十一月廿五日、信義公江府逝去、御行年三拾七歳、御在務三拾二年、八月より御不快ニ被遊御座候所、十一月廿五日、江戸於御屋敷御逝去被遊候、御国へ御逝去の御飛脚十二月七日に到着、御家中諸士剃髪多く有之、江戸にて上野津梁院へ奉葬、御廟弘前長勝寺へ御造立、又此節報恩寺^江新に御霊屋

御創立被遊候、十二月十日より同廿五日まで於

長勝寺御法事有之、

信義公御前

桂光院殿雪峯宗瑞大居士 明暦元年十一月廿五日、

明暦三四年信政公新た寺を御建立被遊、御法名を院号とし一輪山桂光院、報恩寺を御開基被成、寺領貳百石御寄付、仍之御廟所・御石塔・御位牌同寺に有之、信義公御逝去の砌、御家中追腹の侍四人有之、左に、

山本三郎左衛門安次 知行貳百石 御小性、

御病気の由於御国承申候、雪中江戸へ罷登り、十一月廿六日着す、仍而御葬送の則日江戸上野津梁院にて殉死す、介杓村上又右衛門也、三郎左衛門行年十八歳（略）¹⁸

明暦元年十一月二十五日に、津軽信義が江戸で亡くなったという記事である。年齢は三十七歳、在世三十二年であった。八月から体調が不調で、江戸屋敷にて逝去。国元に知らせる飛脚は、十二月七日に到着した。御家中では、出家剃髪した者が数多くいたという。江戸にて、上野寛永寺津梁院に葬り、御廟は弘前長勝寺に造立された。また報恩寺にも新たに御霊屋が御創立され、十二月十日から二十五日まで、長勝寺において法要が営まれた。法名は「桂光院殿雪峯宗瑞大居士」という。明暦三年に、四代信政は、天台宗の報恩寺を開いた。信義の法名を院号として一輪山桂光院報恩寺とし、寺領二百石を寄付した。そのため御廟所・御石塔・御位牌は報恩寺にある。

また信義が逝去した折、家中で後追い自害した侍が四名いた。山本三郎左衛門安次は、病の知らせを聞いて、雪中、江戸に赴く

が到着したのは十一月二十六日であった。葬送の日、江戸上野津梁院において殉死、介杓は村上又右衛門であった。以下、三郎左衛門十八歳などの記事が続く。

この信義の記事に付される形で、側室たちの記事が記される。第一に記されるのは、正室の松平康久の女である。

信義公御前
慶林院殿心膈寿光大姉 貞享^丙四年四月廿七日

松平因幡守康元様の御三男同図書様御息女にて、葉縦院様の御為には御姪子様也、於江戸表御逝去、御年六拾六歳にて上野津梁院に御墓・御石牌^并御位牌有り、御国には御石牌・御廟なし、御位牌は報恩寺にあり、御女子計御兩人有之、御壺人は土井能登守様の御奥様に御なり被遊候、御壺人は御早世也、又松平図書様^{初図書後無三}御奥様には信義公の御室の御実母様也、寛永十一^甲年八月十三日御死去なり、御法名心悅清安大姉、此御死去之節、信義公より寺領三十三石三斗三升御寄附、御法名二字を取て寺号とし、初て清安寺御開基なり、後貞昌寺へ御改葬有り、寺領計清安寺にありて御廟・御位牌貞昌寺にあり、

慶林院は以下の様に紹介される。父康久は、松平因幡守康元の三男で、その女であり、葉縦院から見て姪にあたる。江戸上屋敷で、貞享三年（一六八六）四月に六十六歳で亡くなった。法名を「慶林院殿心膈寿光大姉」という。上野津梁院に墓・石牌・位牌がある。弘前には石牌・御廟はなく、位牌のみが報恩寺にある。肩書に「御前」とあるように、正室ではあったが、子どもが女

子二名のみで、男子がいなかった。女子のうち一人は、土井能登守に嫁いだが、もう一人は早世した。母（松平図書康久の妻）は、寛永十一年（一六三四）八月十三日に亡くなり、法名を「心悅清安大姉」とした。信義からは寺領三十三石三斗三升が寄付され、御法名二字を取つて寺号とした清安寺が開かれた。後に貞昌寺に改葬する。寺領は清安寺にあり、御廟・位牌は貞昌寺にあるという。

『津軽編覽日記』は続いて、二人目の妻として肩書きに「御妾」として久祥院（前述）を記す。正室の松平康久女との間に男子が生まれなかったところに、久祥院が男子を設け、その一人が四代藩主となり、信義に大切にされるのである。

久祥院の記事に続いて、三人目の妻、悪戸御前の記事を記す。

信義公御妾
掩粧長泉院殿光岳妙清大姉 正保三^癸年七月廿二日

世に悪戸御前様と云也、今の斉藤甚兵衛は此御部屋様の御跡也、悪戸村に上悪戸・下悪戸とて二村迄田中に有、悪戸村にて下悪戸と云なり、其処の百性甚五兵衛と云者の娘也、信義公御鷹野に御出被遊、此娘を御覽せられ御取立被遊、後に御前様と奉称、御妾・御愛女数十人被成御座候内、殊の外御意に應じたる御部屋様なり、久祥院様には御子被成御座、其上信政公を御誕生二付、御祝儀事の日には御上座に被成御座候得共、御寵愛は此御部屋様第一に被成御座候よし、然共御子無御座故、久祥院様より御次座に御着座被成候を、平日悉く御いきとおり御しつとの気味被成御座候由、禪宗の福寿院は、此御大病の節御建立被成たると也、此御腹に御姫様御壺

人有、是は堀伝左衛門室也といへり、兵庫様は此御腹に御出生と云ハ誤り也、御殿方御老人も御出世無之故、外の御妾の御男子御もらひ被成、是則兵庫様也と云、後に此御腹に津輕主馬殿御出生也共云、信義公御逝去後は北の丸に被成御座、其後堀伝左衛門殿宅に被成御座候由、御一生信義公より御頭戴の金銀多御所持被成候而、信義公御逝去以後御菩提の為、又御一分御若き時しつと抔被成御座候を、御老年の後御後悔にて是らの御為に報恩寺にて鐘楼を御建立被成候、牡丹の御紋付有之、鐘楼は此御部屋様の御建立也、惣て信義公には御妾御愛女數十人被成御座、内久祥院様と長松院様と御兩人計を御部屋と申せしと也、報恩寺^并福寿院に御位牌有し、報恩寺御位牌には長松院殿とあり、福寿院御位牌には長松院と有、是は福寿院の方間違か、御尊骸は報恩寺へ葬し奉る、

三人目の妻は、肩書に「御妾」と記す。通称「悪戸御前様」と言われた女性である。この名前の由来は、悪戸村の出身だからであった。悪戸村には上悪戸と下悪戸があり、下悪戸の百姓の甚五兵衛という者の娘であった。百姓の娘が藩主の妾となつたいきさつであるが、三代信義が鷹野に出かけてお遊びになつて折に、この娘を目に留めて、取り立てたという。

信義には多くの妾・愛女が数十人もいたというが、その中で特に大事にされたのが、久祥院と悪戸御前で、二人だけが「お部屋様」とされている。とりわけ「御前様」と通称された悪戸御前は殊の外、信義に愛された女性であった。

しかし久祥院に男子が生まれ、その一人が世継ぎの信政となつ

たのに比して、悪戸御前には男子が生まれなかった。信政の母である久祥院は、特別待遇であり、誕生の祝儀事の日には、久祥院は女性たちの中で最も上座に着座となつた。悪戸御前は、一番の寵愛を受けていたが、御子がいなかったため、着座が久祥院が先でその次座になることを、いつも憤り、嫉妬していたという。

悪戸御前は、娘を一人産んでいるが、この娘は、後に堀伝左衛門の奥方となつた。この間に「兵庫様」が生まれたというのは誤伝である。この二人の間には、男子も女子も生まれなかったため、他の妾の男子をもらったのが、いわゆる「兵庫様」である。信義の逝去後は、しばらく北の丸に留まつたが、その後には堀伝左衛門殿宅で過ごした。

寵愛が深かつた悪戸御前は、信義より多くの金銀を受け取つていた。信義逝去の後は、菩提を弔うため、また若い時に嫉妬ばかりしていたことを後悔し、その懺悔のために、報恩寺に鐘楼を建立した。牡丹の紋が付けられている鐘楼が、この悪戸御前の建立したものである。

悪戸御前は、正徳三年（一七一三）七月二十二日に亡くなり、法名を「掩粧長泉院殿光岳妙清大姉」と言う。報恩寺と福寿院に位牌がある。禅宗の福寿院は、信義が病気の折、悪戸御前が病氣平癒を願つて建立した寺である。報恩寺の位牌には長泉院殿とあり、福寿院の位牌には長松院とある。これは福寿院の方の間違いなのだろうか。ご尊骸は報恩寺に葬つた、ということである。この記事からは、第一に寵愛された悪戸御前に嫉妬されるほど、多くの女性たちの中で、とりわけ信義に大事にされた久祥院の姿が読み取れる。

六、『久祥院殿写経』の書写奉納

最後に、『久祥院殿写経』の書写奉納の事情について検討してみたい。『久祥院殿写経』には奥書がなく、箱書もない。『久祥院殿写経』を所蔵する隣松寺では、生前仏教に帰依し、信仰に篤かった久祥院が写経したもので、延宝六年（一六七八）四月八日、隣松寺に納めたものと伝えている。昭和三十年に「県重宝」として指定を受けた際も、この伝に従っている。

隣松寺は、曹洞宗の寺院で、青森県弘前市西茂森町の禅林街三十三ヶ寺の一つである。長勝寺を主座とする上寺の南側奥で、長勝寺と陽光院の間にある。蟠竜山と号し、本尊は釈迦如来である。もと長勝寺客末寺とされる。開山は梅英春香。寺録は一〇〇石の寺院である。享禄年間に、吉田村（賀田村）に開基し、慶長年間に弘前に移ってきたという。開山祖師は真顛寿泉、開基檀那は華厳春公というが詳細はわからない。²⁰⁾

『寺社領分限帳』には、少し詳しく隣松寺の記事がある。

一、高百石 有高

信政公貞享年中御寄附

一、慶長年中吉田村より当時^(寛)移、

一、御廟、同瑞籬、同塀

一、御位牌堂

(略)

一、久祥院様御膳部 御紋付黒塗御枕皆具、二・三

ノ御膳、御飯次、御湯次、信政公寄附、一通

一、御通膳 右同断、

(略)

一、御持仏堂 本尊如意輪観音壹体、拾壹面観音一体、

信政公元禄五年八月御寄進、

一、仮名書法華経 右同断、 一部

一、御石灯籠 信政公元禄六年二月御寄附、 二

一、御手水石 右同断、 一

これによると、当時隣松寺は長勝寺の配下で石高が百石の寺院であった。隣松寺の所蔵物の書き上げの中に「一、仮名書法華経一部」があり、「信政公元禄五年八月御寄進」とあり、弘前藩第四代藩主で久祥院の子である信政が、元禄五年に寄進したものと記録されている。

弘前藩の藩庁日記等、記録類から、延宝六年の書写奉納記事は見いだせない。延宝六年四月は、津軽信政は江戸にいて、江戸から母久祥院に豪華な着物を送ったりしているそうである。

久祥院の生涯から、『久祥院殿写経』の書写奉納の年代を改めて確認する。久祥院は、寛永七年（一六三〇）に生まれる。信政が生まれるのは正保三年（一六四六）八月二十八日、久祥院十七歳の時である。明暦元年（一六五五）十一月二十五日に三代津軽信義が江戸で没する。その時信義は三十七歳、久祥院は二十六歳、信政は十歳。明暦二年（一六五六）二月二日に、十一歳の信政が家督を継ぎ、四代藩主となった。

隣松寺で伝える久祥院が隣松寺へ奉納した延宝六年（一六七八）四月八日という時期は、久祥院は四十九歳、信政は三十三歳であ

る。信義の逝去の年とは年代が合わない。久祥院が何か発願して行つた法華経書写かと思われるが、詳しい事情は、今のところ不詳である。

元禄五年（一六九二）四月四日、久祥院は六十三歳で亡くなる。『寺社領分限帳』には、隣松寺の項に、「護持仏堂（本尊 如意輪観音）」を、「信政公元禄五年八月御寄進」とあり、さらに「仮名書法花経」を「右同断」として同じ時のものとしている。『寺社領分限帳』では、元禄五年八月に、息子の信政が隣松寺に寄進したものととなっている。この記事からは、信政が母の供養のために奉納したものとも考えられる。信政が母の供養のために制作した可能性も考えられなくはないが、（その場合、書写者は不詳となるが）『寺社領分限帳』で奉納されている久祥院関係の品々の中に、「御碗」などの所持物と思われる品物も確認されるため、延宝六年に久祥院が書写し、護持していた経本を、没後に信政が寄進したものと今のところ考えておきたい。現在はこれ以上、具体的な徴証は得られていない。今後、一層調査することによって明らかにしていきたい。

七、おわりに

以上、青森県弘前市に所在する隣松寺蔵『久祥院殿写経』について、その意義を検討してきた。久祥院自身の書写奉納であるかどうかについては、具体的な徴証はないものの、三代藩主の室、四代藩主母の久祥院による書写とすれば、女性の書写経として貴重な写経である。（勿論、久祥院の発願で書写させたものであつ

ても、貴重である。）

『久祥院殿写経』は、本文が経名と一部漢数字を除いて音読みの仮名書きである点は、特筆される。版経などで指摘されている全文音読みの仮名書き法華経とは異なるものであり、管見のところに類例をみない。なお本文の精査、『法華経』底本の同定などについて、本稿では考察が至らなかった。今後の課題としたい。

(1)「仮名書き法華経」については、野沢勝夫『「仮名書き法華経」研究序説』（勉誠出版、二〇〇六年）、同「訓経に非ざる「仮名書き法華経」について―「翻訳仮名書き法華経」と「簡約仮名書き法華経」の存在―」（弘前学院大学文学部紀要）四六、二〇一〇年）、同「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字（二）」（三）」（弘前学院大学文学部紀要）四七、四九、二〇一〇―一三年）、同「日本語資料としての「仮名書き法華経」について―国語国文学会講演「要旨」―」（弘学大語文）三四、二〇〇八年）、兜木正亨『法華版経の研究』（兜木正亨著作集）一、大東出版社、一九七二年）、中田祝夫『妙一記念館本仮名書き法華経（研究編）』（霊友会、一九九三年）、同『足利本仮名書き法華経（影印篇／翻字編／索引篇）』（勉誠社、一九七四年／一九七七年、饒阿寺蔵本元徳二年年写本）、萩原義雄『西来寺本仮名書き法華経（翻字編）』（勉誠社、一九九四年）、田島毓堂『仮名書き法華経の研究―佼成図書館蔵法華経和歌付き（影印篇）』（右文書院、一九九八年）、同『法華経訓読史研究の諸問題』（名古屋大学文学部研究論集）一二四、一九九六年三月）、同『法華経為字和訓の研究』（風間書房、一九九九年）、大坪併治『訓点語の研究』（風間書房、一六六一年）、川瀬一馬『かな書きの妙法蓮華経』（『日本書誌学之研究』講談社、一九四二年）、禿氏祐祥『法華経の訓経について』（『龍谷史談』三三、一九四九年（二月）、柴佳世乃『法華経の訓読―仙岳院蔵（仮名書き法華経）―』（宝鏡寺蔵妙法天経解釈全注釈と研究）笠間書院、二〇〇一年）、柏谷直樹『摩尼園蔵版本「仮名書き法華経」について』（『国語学論集』築島裕博士傘寿記念会、汲古書院、二〇〇五年）、恋田知子（翻刻）陽明文庫蔵「道書類」の紹介（十三）―『仮名書き法華経』巻第七「翻刻・略解題」（『三田国文』五七、二〇一三年）などを参照した。ま

た筆者はこれまで『法華経』の談義書について様々な検討を行ってきた。拙稿に、「法華経注釈書の位相―轍塵抄」の「訓読之志」を端緒として―（『仏教文学』二四、二〇〇〇年三月）、「經典の注釈―談義所における学問の継承と再生産―」（『日本文学』五四、二〇〇五年七月）、「天台仏教と古典文学」（『天台学探尋―日本の文化・思想の核心を探る―』法蔵館、二〇一四年）、「法華経の講会・論義・談義書」（『法華経と日蓮』シリーズ日蓮1、春秋社、二〇一四年）などがある。

- (2) 弘前藩主や久祥院については、長谷川成一『弘前藩』（日本歴史叢書、吉川弘文館、二〇〇四年）、本田伸『弘前藩』（シリーズ藩物語、現代書館、二〇〇八年）、長谷川成一『津軽藩の基礎的研究』（国書刊行会、一九八四年）、黒滝十二郎『弘前藩政の諸問題』（北方新社、一九七七年）、『青森県史 資料編 近世1 近世北奥の成立と北方世界』（青森県、二〇〇一年）、『青森県史 資料編 近世2 前期津軽領』（青森県、二〇〇二年）、『新編弘前市史 資料編1』（弘前市、一九九六年）、『新編弘前市史 資料編2』（弘前市、二〇〇〇年）、『新編弘前市史 通史編2 近世編1』（弘前市、二〇〇二年）、坂本寿夫『弘前藩記事』一〜四 津軽近世史料（北方新社、一九八七〜九二年）、『目で見る津軽の歴史』（弘前市立博物館、一九八〇年）、『津軽家の名品』展示図録（弘前市立博物館、一九八九年）、『図説 青森県の歴史』（河出書房新社、一九九一年）、『図説 弘前・黒石・中津軽の歴史』（郷土出版、二〇〇六年）などを参照した。また一々に記さないが、長谷川成一氏、鶴巻秀樹氏、小石川透氏に御教示を得た。

(3) 『青森県の文化財』（青森県教育委員会、一九九七年）による。

(4) 『久祥院殿位牌堂』については、同『青森県の文化財』に、「県重宝／〈江戸時代中期 元禄年間（一六八八〜一七〇三）〉として以下のように解説する。

この位牌堂は、元禄年間（一六八八〜一七〇三）に津軽四代藩主信政が、実母久祥院殿のために菩提寺隣松寺に寄進したものである。台座の上に置かれた建築型一間厨子の形を取っており、宝形造木瓦葺の屋根の正面には軒唐破風を付けて、屋根の頂上には露盤宝珠を載せている。

全体に黒漆が塗られ、細部に付けられた金具や細工物に特徴があり、細木を組み合わせた内部の格天井など、凝った造りであり、地方色豊かなものとなっている。

(5) 第一冊の翻刻・入力に際しては、白川亜依氏の協力を得た。なお第二冊については、渡辺麻里子「隣松寺蔵『久祥院殿写経』（仮名書き法華経）について―【翻刻】隣松寺蔵『久祥院殿写経』第二冊（譬喩品第三・信解品第四）―」（『弘前大学国語国文学』三八、二〇一七年三月）に翻刻を掲載した。第三冊〜八冊については別稿とする。

(6) 界線は、全体が銀泥で引かれるが、第一冊の冒頭、第二冊の冒頭一丁などに限り、一部墨書の箇所がある。

(7) 本文は、『法華経』上（岩波文庫）による。

(8) 本文は、『新国訳大蔵経 無量義経・法華経上』（大蔵出版）による。

(9) 本文は、中田祝夫『足利本仮名書き法華経 翻字篇』（前掲注1）による。

(10) 本文は、萩原義雄編『西来寺蔵 仮名書き法華経 翻字篇』（前掲注1）による。

(11) 版経音よみ仮名本『法華経』巻一「冒頭の本文は、兜木正亨『法華版経の研究』の「仮名本法華経」の章（前掲注1）より引用した。

(12) 野沢勝夫「訓経に非ざる「仮名書き法華経」について」（前掲注1）による。

(13) 野沢氏は、前掲注1の論考で、①〜⑥の他に、一品以上の分量はないものの、同じグループに認められるものを「仮名法華経切れ」として、五点を紹介する。

(14) 本文は、小松茂美『古筆学大成』二五（講談社、一九九三年）による。

(15) 『法華経』本文は、岩波文庫本による。

(16) 大平祥弥氏の御教示による。大平祥弥「元禄の弘前藩士 添田儀左衛門貞俊論」（平成二十六年卒業研究）に詳しい。

(17) 『奥富士物語』七。久祥院が元禄五年（一六九二）に亡くなったことに関する記事。本文は、『新編青森県叢書』六（歴史図書社、一九七三年）二四二頁による。

(18) 『津軽編覧日記』二 明暦元年十一月二十五日条による。本文は、『新編 弘前市史』資料編2 近世編1、三三二頁（一九九六年）によった。

(19) 隣松寺については『青森県の地名』、『曹洞諸寺院縁起志』（『新編弘前市史』資料編3（近世編2））などを参照した。

(20) 『寺社領分限帳』（『新編弘前市史』資料編3・近世編2、二〇〇〇年）による。

【付記】

久祥院写経の調査および撮影について、隣松寺御住職様にはご許可を賜り、久祥院についても様々にご教示いただきました。誠にありがとうございます。誠にありがとうございました。また久祥院写経や藩主信義・信枚などについて、長谷川成一氏、小石川透氏、鶴巻秀樹氏には、ご教示を多々賜りました。略儀ながら、ここに御礼申し上げます。

【翻刻】隣松寺蔵『久祥院殿写経』第一冊

（序品第一・方便品第二）

〔凡例〕

- ・底本は、隣松寺蔵『久祥院写経』写八冊を用いる。
- ・改行は原典のままにし、丁数を「」（一オ）」などの形で示した。
- ・朱書の句点は「。」、見出点の朱書の○は「○」、見出点の朱書の三点は「△」として表記した。

〔表紙〕



〔第一・序品〕

妙法蓮華経じよほんだい一

によぜがもん。一じぶつちう。わうしやじやう。ぎ
 しゃくつせんちう。よだいびくしゆ。まん二せん
 にく。かいぜあらかん。しよろいじん。むぶほんなう。
 たいとくこり。じんしようけつ。しんとくじざい。
 ごみやうわつ。あにやけうちんによ。まかかせう。
 うるびんらかせう。がやかせう。なだいかせう。しや

『（一オ）』

りほつ。だいまくけんれん。まかかせんゑん。あぬるだ。
こうひんな。けうほんはだ。りはだ。ひつりやうかば
しや。はくら。まかくちら。なんだ。そんだらなんだ。

ふるな。みたらにし。しゆほだ。あなん。らごら。によ

ぜしゆ。しよちしき。だいらかんと。ぶうかく 『(1ウ)

むがく。二せんにん。まかはじやほだ。よけん
ぞく六せんにんく。らごらも。やしゆたらびくに。

やくよけんぞくく。ほさつまかさつ。八まんにん。かいお

あのかたら。三みやくさんほだ。ふたいてん。かいとく

だらに。げうぜつべんざい。てんふたいてんほうりん。

くやうひりやう。百千しよふつ。おしよぶつしよ。 『(2オ)

じきしゆとくほん。じやうあしよぶつ。ししよせう

だん。いじしゆしん。ぜんにうぶつゑ。つうだつだ

ち。たうおひが。みやうせうふもん。むりやうせかい。

のうどむしゆ。百千しゆじやう。ごみやうわつ。もん

じゆしりほさつ。くはんぜをんほさつ。とくだいせい

ほさつ。じやうしやうじんほさつ。ふくそくほさつ。 『(2ウ)

ほうしやうほさつ。やくわうほさつ。ゆぜほさつ。

ほうぐほさつ。ぐはつくはうほさつ。まんぐほさつ

さつ。だいきほさつ。むりやうりきほさつ。おつ

三がいほさつ。ばつだばらほさつ。みろくほさつ。

ほうしやくほさつ。だうしほさつ。によせとうほ

さつまかさつ。八まんにんく。にじしやくだいくはん 『(3オ)

ゑん。よごけんぞく。二まんでんしく。ぶうみやうぐはつ

てんし。ふかうてんし。ほうくはうてんし。四だいてん

わう。よごけんぞく。まんでんしく。じぎいてんし。

だいいぎいてんし。よごけんぞく。三まんでんしく。

しやばせかいしゆ。ほんでんわう。しきだいほん。くはう

みやうだいほんとう。よごけんぞく。まん二千てんし 『(3ウ)

く。う八りうわう。なんだりうわう。ばつなんだりう

わう。しやかりうわう。わしゆきつりうわう。

とくしやかりうわう。あなばだつたりうわう。ま

なしりうわう。うはつらりうわう。かくよにやく

かん。百千けんぞくく。うしきんならわう。ほう

きんならわう。めうほうきんならわう。だいはう

きんならわう。ちほうきんならわう。かくよにやく

かん。百千けんぞくく。うしけんだつばわう。かくけん

だつばわう。かくをんけんだつばわう。みけんだつ

ばわう。みをんけんだつばわう。かくよにやくかん。

百千けんぞくく。うしあしゆらわう。はちあしゆら

わう。からこんだあしゆらわう。びましつたらあしゆ 『(4ウ)

らわう。らごあしゆらわう。かくよにやくかん。百千

けんぞくく。うしかるらわう。だいろとくかるらわう。

だいいんかるらわう。だいまんかるらわう。によい

かるらわう。かくよにやくかん。百千けんぞくく。あ

だいいし。あじやせわう。よにやくかん。百千けん

ぞくく。かくらいぶつそく。たいぎ一めん。にしせそん。 『(5オ)

四しゆゑ。くやうくぎやう。そんちうさんだん。

ゑんしよほさつ。せつだいいせうきやう。みやうむりやうぎ。

けうほさつほう。ぶつしよごねん。ぶつせつしきやう

い。けつかふぎ。にうおむりやう。ぎしよざんまい。しんぐ
 ぶどう。ぜじてんう。まんだらけ。まかまんだらけ。
 まんじゆしやけ。まかまんじゆしやけ。にさんぶつ 『(5ウ)
 じやう。ぎつしよだいしゆ。ふぶつせかい。六しゆしん
 どう。にじゑちう。びくびくに。うばそくうばい。てん
 りうやしや。けんだつば。あしゆら。かるら。きんなら。
 まごらが。にんひにん。ぎつしよせうわう。てんりんじやう
 わう。ぜしよだいしゆ。とくみぞうう。くはんぎがつ
 じやう。一しんくはんぶつ。にしぶつはう。みけんびやく『(6オ)
 がうさうくはう。せうとうぼう。まん八千せかい。みふ
 しゆへん。げしあびぢごく。じやうしあかにだてん。
 おしせかい。じんけんひど。六しゆくじやう。うけん
 ひど。げんざいしよぶつ。ぎうもんしよぶつ。しよ
 せつきやうぼう。びやうけんひしよ。びくびくに。うば
 そくうばい。しよしゆぎやうとくどしや。ぶけん
 『(6ウ)
 しよぼさつ。まかさつ。しゆくゝめんえん。しゆくゝ
 しんげ。しゆくゝさうめう。ぎやうぼさつだう。ぶけん
 しよぶつ。はつねはんしや。ぶけんしよぶつ。はつ
 ねはんご。いぶつしやり。きしつほうたう。にじみ
 ろくぼさつ。させねん。こんしやせそん。げんじんべん
 さう。いがめんえん。にうしずい。こんぶつせそん。 『(7オ)
 にううざんまい。ぜふかしぎ。げんけうじ。たうい
 もんすい。すいのうたうしや。ぶさしねん。ぜもん
 じゆしり。ほうわうしし。いぞうしんごん。くやう
 くはこ。むりやうしよぶつ。ひつおうけんし。けう

しさう。がこんたうもん。にじびくびくに。うば
 そくうばい。ぎつしよてんりうきじんとう。げん
 さしねん。ぜぶつくはうみやう。じんづうしさう。 『(7ウ)
 こんたうもんすい。にじみろくぼさつ。よくじ
 けつぎ。うくはん四しゆ。びくびくに。うばそくうばい。
 ぎつしよてんりう。きじんとう。しゆゑししん。に
 もんくじゆしりごん。いがめんえん。にうしずい。
 じんづうしさう。はうだいこくはうみやう。せうう
 とうぼう。まん八せんご。しつけんひぶつ。こくかい
 じやうごんおせみろくぼさつ。よくぢうせん
 しぎ。いげもんわつ
 △もんじゆしり だうしがこ みけんびやく
 がう だいくはうふせう うまんたら まんじゆ
 しやけ せんだんかうふう ゑつかしゆしん
 いぜめんえん ぢういごんじやう にしせかい 六しゆ
 しんだう じ四ぶしゆ げんかいくはんぎ しんい
 けねん とくみぞうう みけんくはうみやう
 せううとうぼう まん八千ご かいによこん
 じき じうあひこく じやうしうちやう しよ
 せかいちう 六だうしゆじやう しやうじしよ
 しゆ ぜんあくごうゑん じゆほうかうじゆ おし
 しつけん うとしよぶつ しやうじゆしじ ゑん
 ぜつきやうでん みめうだい一 ごしやうしやうく
 しゆつにうなんをん けうしよぼさつ むしゆ
 おくまん ほんをんじんめう りやうにんげうもん
 『(8オ)
 『(9オ)

かくおせかい かうぜつしやうほう しゆくゝゐん 『(9ウ)』

えん いむりやうゆ せうみやうぶつほう かいご
しゆじやう にやくにんさうぐ ゑんらうびやう

し むせつねはん じんしよくさい にかく
にんうぶく ぞうくやうぶつ しぐせうほう

ゐせつえんがく にやくうぶつし しゆくゝ 『(10オ)』
しゆぎやう ぐむじやうゑ むせつじやうだう

もんじゆしり がちうおし けんもんにやく
し ぎうせんおくじ によせしゆた こんたう

りやくせつ がけんひど ごうじやぼさつ
しゆくゝゐんえん にぐぶつだう わくうぎやう

せ こんくゝさんご しんじゆまに しやこめ 『(10ウ)』
なう こんがうしよちん ぬびしやせう ほう

じきれんよ くはんぎふせ ゑかうぶつだう
ぐはんとくぜせう 三がいだい一 しょぶつしよ

たん わくうぼさつ しめほうしや らん
じゆんけかい かんじきふせ ぶけんぼさつ しん

にくしゆそく ぎうさいしせ ぐむじやうだう 『(11オ)』
うけんぼさつ づもくしんだい こんげうせ

よ ぐぶつちゑ もんじゆしり がけんしよ
わう わうけいぶつしよ もんむじやうだう べん

しやらくど かうでんしんぜう たいぢよ
しゆほつ にひほうぶく わくけんぼさつ

にさびく どくしよけんじやう げうしやきやう
でん うけんぼさつ ゆみやうしやうじん にうお 『(11ウ)』

じんせん しゆいぶつだう うけんりよく

じやうしよくうげん じんしゆぜんでう とく五
じんづう うけんぼさつ あんぜんがつしやう

いせんまんげ さんしよほうわう ぶけんぼさつ
ちじんしこ のうもんしよぶつ もんしつ

じゆぢ うけんぶつし でうゑぐそく いむ 『(12オ)』
りやうゆ むしゆかうほう こんげうせつほう

けしよぼさつ はまひやうしゆ にきやくほつ
く うけんぼさつ じやくねんゑんもく てん

りうくぎやう ふいゐき うけんぼさつ
しよりんはうくほう さいぢごくく りやうにう

ぶつだう うけんぶつし みしやうすいめん 『(12ウ)』
きやうくゝりんぢう こんぐぶつだう うけん

ぐかい むぎむけつ じやうによほうじゆ
いぐぶつだう うけんぶつし ぢうにんにく

りき ぞうじやうまんにん おめすいちやう かい 『(13オ)』
しつのにん いぐぶつだう うけんぼさつ

りしよけせう ぎつちけんぞく しんごんち
しや 一しんぢよらん せうねんせんりん

おくせんまんざい いぐぶつだう わくけんぼ
さつ けうぜんおんじき 百しゆたうやく

せぶつぎつそう みやうゑじやうぶく けぢき 『(13ウ)』
千まん わくむげゑ せぶつぎつそう 千

まんおくしゆ せんだんほうしや しゆめう
ぐはぐ せぶつぎつそう しやうくゝをんりん

けくはむじやう るせんよくち せふつぎつ
 そう によぜとうせ しゆぐみめう くはん
 ぎむえん ぐむじやうだう わくうほさつ

せつじやくめつほう しゆぐけうせう むしゆく
 じやう わくけんぼさつ くはんしよほつしやう
 むう二さう ゆによこくう うけんぶつ

『(14オ)』

し しんむしよぢやく いしめうえ ぐむじやう
 だう もんじゆしり うくほさつ ぶつめつ
 だご くやうしやり うけんぶつし さうしよ
 たうめう むしゆごうじや ごんじきこくかい
 ほうたうかうめう 五千ゆしゆん じうくほうしやう
 とう 二千ゆじゆん いちくたうめう かく
 せんどうばん しゆけうろまん ほうりやうわ
 みやう しよてんりうじん にんぎうひにん
 かうけきがく じやうめくやう もんじゆしり
 しよぶつしとう めくしやり ごんじきたう
 めう こくかいじねん しゆどくめうかう

『(15オ)』

によてんじゆわう ごけかいふ ぶつはういつ
 くほう がぎうしゆゑ けんしこくかい しゆぐ
 しゆめう しよぶつじんりき ちゑけう ほう
 一じやうくほう せうむりやうこく がとうけんし
 とくみぞうう ぶつしもんじゆ ぐはんけつ
 しゆぎ 四しゆごんかう せんにんぎうが せそん
 がこ ほうしくほうみやう ぶつしじたう けつ
 ぎりやうき がしよねうやく ゑんしくほうみやう

『(15ウ)』

ぶつざだうぢやう しよとくめうほう めよくせつ

し めたうじゆき じしよぶつど しゆ

ほうごんじやう ぎうけんしよぶつ しひせう

えん もんじゆたうち 四しゆりうじん せん

『(16オ)』

ざつにんしや めせつがとう

△にじもんしゆしり。ごみろくほさつまかさつ。ぎつ

しよだいし。ぜんなんしとう。によがゆいじゆん。

こんぶつせそん。よくせつだいほう。うだいほうう。

すいだいほうら。きやくだいほつく。ゑんだいほう

ぎ。しよぜんなんし。がおくはこ。しよぶつ。ぞうけん『(16ウ)』

しずい。ほうしくほうい。そくせつだいほう。ぜこ

たうち。こんぶつげんくほう。やくぶによせ。よく

りやうしゆじやう。げんとくもんち。一さいせけん。なん

しんしほう。こげんしずい。しよぜんなんし。によ

くはこ。むりやうむへん。ふかしぎ。あそうぎこ。に

じうぶつ。がうにちぐはつとうみやう。によらい。『(17オ)』

おうぐしやうへんち。みやうぎやうそく。ぜんぜいせけん

げ。むじやうじ。てうごちやうぶ。てんにんし。ぶつ

せそん。ゑんせつしやうほう。しよぜんちうぜんご

ぜん。ごぎじんをん。ごぐけうめう。じゆん一むぎう。

ぐそくしやうびやく。ほんぎやうしさう。ゑぐしやう

もんしや。せつおう四たいほう。どしやうらうびやう 『(17ウ)』

し。くきやうねはん。ゑぐひやくしぶつしや。せつ

おう十二ゑんえんほう。ゑしよほさつ。せつおう

六はらみつ。りやうとくあのかたら。三みやく三ぼ

だい。じやう一さいしゆち。しほうぶつ。やくみやう
 にちぐはつとうみやう。しほうぶつ。やくみやう
 にちぐはつとうみやう。によせ二まんぶつ。かいどう
 一じ。がうにちぐはつとうみやう。うどう一しやう。
 しやうはらだ。みろくたうち。しよぶつごぶつ。かい
 どう一じ。みやうにちぐはつとうみやう十がうぐそく。
 しよかせつほう。しよちうごせん。ごさいごぶつ。
 みしゆつけじ。う八わうじ。一みやううい。二みやう
 ぜんい。三みやうむりやうい。四みやうほうい。五みやう『18ウ』
 ぞうい。六みやうぢよぎい。七みやうかうい。八みやうほう
 い。ぜ八わうじ。ゑとくじざい。かくりやう四てんげ。
 ぜしよわうじ。もんぶしゆつけ。とくゑのくたら。
 さんみやく三ぼだい。しつしやわうい。やくずいしゆつ
 け。ほつだいぜうい。じやうしゆぼんぎやう。かいゑほつ
 し。いおせんまんぶつしよ。じきしよせんほん。ぜじ『19オ』
 にちぐはつとうみやうぶつ。せつだいぜうきやう。
 みやうむりやうぎ。けうぼさつほう。ぶつしよごねん。
 せつぜきやうい。そくおだいしゆぢう。くつかふざ。
 におむりやう。ぎしよざんまい。しんぐふどう。
 ぜじてんう。まんだらけ。まかまんだらけ。まん
 じゆしやけ。まかまんじゆしやけ。にさんぶつじやう。『19ウ』
 ぎつしよだいしゆ。ふぶつせかい。六しゆしんどう。
 にじゑちう。びくびくに。うばそくうばい。てんりう
 やしや。けんたつば。あしゆら。かるら。きんなら。まごら
 か。にんひにん。ぎつしよせうわう。てんわんじやうわう

とう。ぜしよだいしゆ。とくみぞうう。くはんぎ
 がつしやう。一しんくはんぶつ。にじによらい。ほうみ『20オ』
 けん。びやくがうさうくほう。せうとうばう。まん八
 千ぶつど。みふしゆへん。によこんしよけん。ぜ
 しよぶつと。みろくたうち。にじゑちう。う二十
 おくぼさつ。げうよくちやうほう。ぜしよぼさつ。
 けんしくほうみやう。ふせうぶつど。とくみぞう
 う。よくちしくほう。しよゑんえん。じうぼさつ。『20ウ』
 みやうわつめうくほう。う八百でし。ぜじにち
 ぐはつとうみやうぶつ。じうざんまいき。ゑんめう
 くほうぼさつ。せつだいぜうきやう。みやうめうほう
 れんげ。けうぼさつほう。ぶつしよごねん。六十
 せうごう。ふきうぎ。じゑちやうじや。やくざいつ
 しよ。六十せうごう。しんぐふどう。ちやうぶつ
 しよせつ。ゑによじききやう。ぜじしゆぢう。むう一
 にん。にやくしんにやくしん。にしやうげけん。にちくはつ
 とう
 みやうぶつ。お六十せうごう。せつぜきやうい。そくお
 ぼんましやもんばらもん。ぎうてんにん。あしゆら
 しゆぢう。にせんしごん。によらいおこんにちちうや。
 たうにうむよねはん。じうぼさつ。みやうわつとく
 ざう。にちぐはつとうみやうぶつ。そくじゆぎき。がう
 しよびく。ぜとくざうぼさつ。したうさぶつ。がうわつ
 じやうしん。たゝあかど。あらか。三みやく三ぶつだ。
 ぶつじゆきい。べんおちうや。にうむよねはん。ぶつ

めつどご。めうくほうぼさつ。ぢめうほうれんげきやう。

まん八十せうごう。ゐにんゑんぜつ。にちぐはつとうみやう

『22オ』

ぶつ。八しかいしめうくほう。めうくほうけうけ。りやうご

けんご。あのくたら。三みやく三ぼだい。ぜしよわうじ。く

やうむりやう。百千まんおくふつ。かいじやうぶつだう。

こさいごしやうぶつしや。みやうわつねんどう。八百で

し。ちうう一にん。がうわつぐみやう。とんぢやくり

やう。すいぶどくじゆしゆきやう。にぶつうり。たしよ『22ウ』

まうしつ。こがうぐみやう。ぜにんやくい。しゆしよせん

ごん。ゐんえんこ。とくちむりやう。百千まんおくしよ

ぶつ。くやうくぎやう。そんぢうさんだん。みろくたうち。

にじめうくほうぼさつ。きいにんこ。がしんせや。ぐみやう

ぼさつ。によしんぜや。こんけんしずい。よほんむい。

ぜこゆいじゆん。こんにちによらい。たうせつだい 『23オ』

ぜうきやう。みやうめうほうれんげ。けうぼさつほう。

ふつしよごねん。にじもんじゆしり。おたいしゆぢう。

よくぢうせんしぎ。にせつげごん

△がねんくはこせ むりやうむしゆこう うぶつにん

ぢうそん がうにちぐはつとうみやう せそんゑんぜつ

ほう どむりやうしゆじやうむしゆおくほさつりやう 『23ウ』

にうぶつちゑ ぶつみしゆつけじ しよしやう

八わうじ けんだいしやうしゆつけ やくずいしゆ

ほんぎやう じぶつせつだいぜう きやうみやうむ

りやうぎ おしよだいしゆぢう にゐんくほうふん

べつ ぶつせつしきやうい そくおほうぎじやう かふ

ぎ三まい みやうむりやうぎしよ てんうまんだ 『24オ』

け てんくじねんみやう しよてんりうきじん

くやうにんぢうそん 一さいしよぶつど そくじ

だいしんどう ぶつほうみけんくほう げんしよ

けうじ しくほうせうとうばう まん八千ぶつ

ど じ一さいしゆじやう しやうじごつほうしよ

うけんしよぶつど いしゆほうしやうごん るりはり 『24ウ』

しき しゆぶつくほうせう ぎうけんしよてんにん

りうじんやしやしゆ けんだつきんなら かくくやう

ごぶつ うけんしよによらい じねんじやうぶつ

だう しんじきによこんせん たんごんじんみ

めう によじやうるりちう ないげんしんこんざう

せそんざいだいしゆ ふゑんじんほうぎ いちくしよ『25オ』

ぶつど しやうもんしゆむしゆ ゐんぶつくほうしよ

せう しつけんひだいしゆ わくうしよびく ざい

おせんりんぢう しやうじんぢじやうかい ゆによご

みやうしゆ うけんしよぼさつ ぎやうせにんにく

とう ごしゆによごうじや しゆぶつくほうせう

うけんしよぼさつ じんにうしよぜんどう しんぐ 『25ウ』

じやくふどう いぐむじやうだう うけんしよぼ

さつ ちほうじやくめつさう かくおごこくど

せつほうぐぶつだう にじ四ぶしゆ けんにち

ぐはつとうぶつ げんだいじんづうりき ごしん

かいくほんぎ かくくじさうもん ぜじがゐん

えん てんにんしよぶそん しやくじうざんまい 『(26オ)
 き さんめうくはうぼさつ によゐせけんぐく 一さい
 しよきじん のうぶちほうざう によがしよせつ
 ほう ゆいによのうせうち せそんぎさんだん
 りやうめうくはうくはんぎ せつせほけきやう まん
 六十せうごう ふきおしぎ しよせつじやうめう
 ほう ぜめうくはうぼつし しつかいのうじゆぢ
 ぶつせつせほつけ りやうしゆくはんぎい じん
 そくおぜにち がうおてんにんしゆ しよほうじつ
 さうぎ いるによとうせつ がこんおちやうや たう
 にうおねはん によしんしやうじん たうりお
 ほういつ しよぶつじんなんち おくこうじ一ぐ
 せそんしよしとう もんぶつにうねはん かくく
 ゑひなう ぶつめつ一がそく しやうじゆほうし
 わう あんゐむりやうしゆ がにやくめつどじ
 によとうもつうふ ぜとくざうぼさつ おむろじつ
 さう しんいとくつうだつ ごしたうさぶつ
 がうわつゐじやうしん やくどむりやうしゆ ぶつし
 やめつど によしんぐく くはめつ ぶんふしよしや 『(27ウ)
 り にきむりやうたう びくびくに ごしゆ
 によごうじや ばいぶかしやうじん いぐむじやう
 だう ぜめうくはうぼつし ぶぢぶつほうざう 八十
 せうごうちう くはうせんほけきやう ぜしよ八わう
 じ めうくはうしよかいけ けんごむじやうだう たう
 けんむしゆぶつ くやうしよぶつし ずいじゆんぎやう』(28オ)

だいだう さうけいとくじやうぶつ てんしにじゆき
 さいごてんちうてん がうわつねんだうぶつ しよせん
 しだうし どだつむりやうしゆ ぜめうくはうぼつ
 し じう一でし しんじやうゑけだい とんぢやく
 おみやうり ぐみやうりむゑん たゆぞくしやうけ き
 しやしよしゆじゆ はいまうふつうり いぜゐんえん 『(28ウ)
 こ がうしゐぐみやう やくぎやうしゆせんこう
 とくけんむしゆぶつ くやうおしよぶつ ずいじゆん
 ぎやうだいだう ぐ六はらみつ こんけんしやくし
 し ごゑたうさぶつ がうみやうわつみろく くはう
 どしよしゆじやう ごしゆむうりやう ひぶつめつど
 ご けだいいしやによぜ めうくはうほうししや 『(29オ)
 こんそくがしんぜ がけんとうみやうぶつ ほんくはう
 ずいによし いぜちこんぶつ よくせつほけきやう
 こんさうによほんずい せしよぶつはうべん こんぶつ
 ほうくはうみやう じよほつじつさうぎ しよにん
 こんたうち がつしやうしんたい ぶつたうほう
 う じうそくぐだうしや しよぐ三ぜうにん 『(29ウ)
 にやくうぎげしや ぶつたうゐぢよだん りやう
 じんむうよ

〔第二・方便品〕

○妙法蓮華経はうべんほんだいい二
 にじせそん。じうざんまい。あんじやうにき。がうしや
 りほつ。しよぶつちゑ。じんぐくむりやう。ごちゑもん。

なんげなんにう。一さいしやうもん。ひやくししぶつ。しよ

『(30オ)』

ふのうち。しよいしやが。ぶつぞうしんごん。百千

まんおく。むしゆしよぶつ。じんぎやうしよぶつ。む

りやうだうほう。ゆみやうしやうじん。みやうせうふもん。

じやうじゆじんぐ。みぞうほう。ずいぎしよせつ。

いしゆなんげ。しやりほつ。ごじうじやうぶついらい。

しゆぐゑんえん。しゆぐゑひゆ。くほうゑんごんけう。む

『(30ウ)』

しゆほうべん。いんたうしゆじやう。りやうりしよぢやく。

しよいしやが。によらいはうべん。ちけんはらみつ。

かいいぐそく。しやりほつ。によらいちけん。くほうだい

じんをん。むりやうむげ。りきむしよい。ぜんでうげだつ

ざんまい。じんにうむざい。じやうじゆ一さい。みぞうほう。

しやりほつ。によらいのう。しゆぐゑふんべつ。げうぜつ『(31オ)』

しよほう。ごんじにうなん。ゑつかしゆしん。しやりほつ。

しゆようごんし。むりやうむへん。みぞうほう。ぶつしつ

じやうじゆ。ししやりほつ。ふしゆぶせつ。しよいしや

が。ぶつしよじやうじゆ。だい一けう。なんげしほう。ゆい

ぶつよぶつ。ないのうぐしん。しよほうじつさう。しよ

るしよほう。によせさう。によせしやう。によぜたい。『(31ウ)』

によせりき。によせさ。によせゑん。によせえん。によ

ぜくは。によせほう。によせほんまつ。くきやうとう。

にじせそん。よくちうせんしぎ。にせつげごん

△せをうふかりやう しててんぎうせにん 一さいしゆ

じやうるい。むのうちぶつしや。ぶつりきむしよ

い。げだつしよざんまい。ぎうぶつしよよほう。むのう『(32オ)』

しきりやうしや。ほんじうむしゆぶつ。ぐそくしよ

ぎやうだう。じんぐゑみめうほう。なんけんなんか

りやう。おむりやうおくこう。ぎやうししよだうい

だうぢやうとくじやうくは。がいしつちけん。によぜ

だいくはほう。しゆぐゑしやうさうぎ。がぎう十はう

ぶつ。ないのうちぜじ。ぜほうふかじ。ごん

『(32ウ)』

じさうじやくめつ。しよよしゆじやうるい。むう

のうとくげ。ぢよしよぼさつしゆ。しんりきけん

ごしや。しよぶつでししゆ。ぞうくやうしよぶつ

一さいろいじん。ちうぜさいごしん。によせしよにん

とう。ごりきしよふかん。けしまんせけん。かい

によしやりほつ。じんしくたくりやう。ふのうしき

ぶつち。しやうしまん十はう。かいにしやりほつ

ぎうよしよでし。やくまん十はうせつ。じんしく

たくりやう。やくぶふのうち。ひやくしぶつりち

むろさいごしん。やくまん十はうせつ。ごしゆによちく

りん。しとうぐ一しん。おをくむりやうこう。よく

しぶつじつち。まくのうちせうぶん。しんぼつ

ぼさつ。くやうむしゆぶつ。りやうだつしよぎ

しゆ。うのうぜんせつほう。によたうまちくる

じうまん十はうせつ。一しんいめうち。おごうがしや

こう。げんかいかぐしりやう。ふのうちぶつち

ふたいしよぼさつ。ごしゆによごうじや。一しんぐし

『(33ウ)』

ぐ やくぶふのうち うかうしやりほつ むろ 『(34オ)』

ふしぎ しんぐみめうほう がこんいくどく ゆい
がちぜさう 十はうぶつやくねん しやりほつ

たうち しょふつごむい おぶつしよせつほう

たうしやうだいしんりき せそんほうくご えうたう

せつしんじつ がうしよしやうもんしゆ ぎうぐえん

がくぜう がりやうだつくばく たいとくねはん 『(34ウ)』

しや ぶついはうべんりき じいさんぜうきやう

しゆじやうしよぐちやく いんしりやうとくしゆつ

△にじだいしゆぢう。うしよしやうもん。ろじんあらかん。

あにやけうぢんによとう。千二百にん。ぎうほつしやう

もん。ひやくしぶつしん。びくびくに。うばそくうばい。

かくさせねん。こんしやせそん。がこをんごん。せう 『(35オ)』

だんはうべん。にさせこん。ぶつしよとくほう。しん

しんなんけ。うしよこんせつ。いしゆなんち。一さい

しやうもん。ひやくしぶつ。しよふのうぎう。ぶつせつ

一げだつぎ。かとうやくとく。しほう。たうおねはん。に

こんふち。ぜきしよしゆ。にじしやりほつ。ち四しゆしん

ぎ。じやくみれう。にびやくぶつごんせそん。がゐん 『(35ウ)』

がえん。おんごんせうだん。しよぶつだい一はうべん。

じんぐみめう。なんげしほう。がじしやくらい。みぞうじう

ぶつ。もんによせせつ。こんしや四しゆ。げんかいうぎ。ゆい

ぐはんせそん。ふえんしじ。せそんがこ。おんごんせうだん。

じんぐみめう。なんげしほう。にじしやりほつ。

『(36オ)』

△ゑにちだいしやうそん くないせつぜほう じせつ

とくによぜ りきむゐ三まい ぜんでうげだつ

とう ふかしぎほう だうちやうしよとくほう む

のうほつもんしや がいなんかしき やくむのうもん

しや むもんじせつ せうだんしよぎやうだう

ちゑじんみめう しよぶつししよとく むろ 『(36ウ)』

しよらんかん ぎうぐねはんしや こんかいだぎ

まう ぶつがこせつぜ ごぐえんがくしや びく

びくに しよてんりうきじん ぎうけんだつば

とう さうしゑゆよ せんがうりやうそくそん

せしゐかんが くはんぶつゐげせつ おしよしやう

もんしゆ ぶつせつがたい一 がこんじおち ぎ 『(37オ)』

わくふのうれう めせくきやうほう いぜしよ

ぎやうだう ぶつくしよしやうし がつしやうせん

がうたい ぐはんしゆつみめうをん じゐによじつ

せつ しよてんりうじんとう ごしゆによごう

じや ぐぶつしよぼさつ だいしゆう八まん 『(37ウ)』

うしよまんおくこく てんりんじやうわうし がつ

しやういきやうしん よくもんぐそくだう

△にじぶつがう。しやりほつ。ししふしゆぶせつ。にやく

せつぜし。一さいせけん。しよてんぎうにん。かいたうきやう

ぎ。しやりほつ。ぢうびやくぶつごんせそん。ゆいぐはん

せつし。ゆいぐはんせつし。しよいしやが。ぜゑむしゆ。

百千まんおく。あそうぎしゆじやう。ぞうけんしよぶつ。『(38オ)』

しよこんみやうり。ちゑみやうれう。もんぶつしよ

せつ。そくのうきやうしん。にじしやりほつ。よくぢう
せんしぎ。にせつげごん

△ほうわうむじやうそん ゆいせつぐはんもつりよ ぜゑ
むりやうしゆ うのうきやうしんしや

△ぶつぶししやりほつ。にやくせつせし。一さいせけん。『(38ウ)
てんにんあしゆら。かいたうきやうぎ。ぞうじやうまんび
く。しやうついいおだいきやう。にじせそん。ぢうせつ
げごん

△ししふしゆせつ がほうめうなんし しよぞう
じやうまんしや もんひつふきやうしん

△にじしやりほつ。ぢうびやくぶつごんせそん。ゆい 『(39オ)
ぐはんせつし。ゆいぐはんせつし。こんしゑちう。によがと
ひ。百千まんおく。せゝいぞう。じうぶつじゆけ。によし
にととう。ひつのうきやうしん。ぢやうやあんをん。た
しよねうやく。にじしやりほつ。よくぢうせんしぎ。
にせつげごん

△むじやうりやうそくそん ぐはんせつだいいほう がゐ『(39ウ)

ぶつちやうし ゆいすいふんべつせつ ぜゑむりやう
しゆ のうきやうしんしほう ぶついいぞうせゝ けう

けによせとう かいしんがつしやう よくちやうじゆ
ぶつご がとう千二百 ぎうよぐぶつしや ぐはん
ゐししゆこ ゆいすいふんべつせつ せとうもんし
ほう そくしやうだいくはんぎ 『(40ウ)

△にじせそん。がうしやりほつ。によいをんごんみしやう。
きとくふせつ。によこんたいちやう。せんしねんし。ご

たうゐによ。ふんべつせつ。せつしごじ。ゑちうう

びくびくに。うばそくうばい。五せんにととう。そくじう

ぎき。らいぶつにたい。しよいしやが。しはいざいこんじん
ぢう。ぎうぞうじやうまん。みとくゑとく。みせうゐせう。『(40ウ)

うによししつ。ぜいふちう。せそんもくねん。にふせい
し。にじぶつがう。しやりほつ。がこんししゆ。むぶしえう。
じゆんうでうじつ。しやりほつ。によせぞうじやうまんにん。
たいやくけい。によこんせんちやう。たうゐによせつ。しや

りほつごん。ゆいねんせそん。ぐはんげうよくもん。ぶつがう
しやりほつ。によせめうほう。しよぶつによらい。じ 『(41オ)

ないせつし。にようどんばつけ。じ一げんに。しやりほつ。
によとうたうしん。ぶつししよせつ。ごんふこまう。しや

りほつ。しよぶつずいき。せつほう。いしゆなんげ。しよ
いしやが。がいむしゆほうべん。しゆぐゑんえん。ひゆごん

じ。ゑんぜつしよほう。ぜほうひしりやうふんべつ。し
しよのうげ。ゆいしよぶつ。ないのうちし。しよいしやが。

『(41ウ)

しよぶつせそん。ゆい一だいじ。ゑんえんこ。しゆつ
げんおせ。しやりほつ。うんがみやう。しよぶつせそん。

ゆい一だいじ。ゑんえんこ。しゆつげんおせ。しよぶつ
せそん。よくりやうしゆじやう。かいぶつちけん。しとく
しやうぐゑこ。しゆつげんおせ。よくじしゆじやう。ぶつ
ちけんこ。しゆつげんおせ。よくりやうしゆじやう。ご『(42オ)

ぶつちけんこ。しゆつげんおせ。よくりやうしゆじやう。
にうぶつちけんたうこ。しゆつげんおせ。しやりほつ。

ぜめしよぶつ。ゆい一だいじめんえんこ。しゆつげん
 おせ。ぶつがうしやりほつ。しよぶつによらい。たんけう
 けぼさつ。しようしよさ。じやうゐ一じ。ゆいいぶつし
 ちけん。じごしゆじやう。しやりほつ。によらいたんい。『(42ウ)
 一ぶつぜうこ。ゐしゆじやうせつほう。むうよぜう。
 にやく二にやく三。しやりほつ。一さい十ほう。しよぶつ
 ほうやくによぜ。しやりほつ。くはこしよぶつ。いむりやう
 むしゆほうべん。しゆぐゝゐんえん。ひゆごんじ。にゐしゆ
 じやう。えんぜつしよほう。せほうかいる。一ぶつぜうこ。
 せしよしゆじやう。じうしよぶつもんほう。くきやうかい『(43オ)
 とく。一さいしゆち。しやりほつ。みらいしよぶつ。たう
 しゆつおせ。やくいむりやう。むしゆほうべん。しゆぐゝゐ
 んえん。
 ひゆごんじ。にゐしゆじやう。えんぜつしよほう。せほう
 かいる。一ぶつぜうこ。せしよしゆじやう。じうぶつもん
 ほう。くきやうかいとく。一さいしゆち。しやりほつ。げん
 ざい十ほう。むりやう百千まんおくぶつどちう。しよ 『(43ウ)
 ぶつせそん。たしよねうやく。あんらくしゆじやう。
 じしよぶつ。やくいむりやう。むしゆほうべん。しゆぐゝ
 ゐんえん。ひゆごんじ。にゐしゆじやう。えんぜつしよほう。
 ぜほうかいる。一ぶつぜうこ。せしよしやじやう。じう
 ぶつもんほう。くきやうかいとく。一さいしゆち。しやり
 ほつ。せしよぶつ。たんけうけぼさつ。よくいぶつし 『(44オ)
 ちけん。じしゆじやうこ。よくいぶつしちけん。ごしゆじやう
 こ。よくりやうしゆじやう。にうぶつちけんたうこ。しやり

ほつ。がこんやくぶによぜ。ちしよしゆじやう。うしゆぐゝ
 よく。じんしんしよちやく。ずいごほんじやう。いしゆぐゝゐん
 えん。ひゆごんじ。ほうべんりきこ。にゐせつほう。しや
 りほつ。によしかいる。とく一ぶつぜう。一さいしゆち。『(44ウ)
 こしやりほつ。十ほうせかいちう。しやうむ二ぜう。
 がきやううさん。しやりほつ。しよぶつしゆつお。五ぢよく
 あくせ。しよゐこうぢよく。ほんなうぢよく。しゆじやう
 ぢよく。けんぢよくみやうぢよく。によぜしやりほつ。
 こうぢよくらんじ。しゆじやうくぢう。けんどんしつと。
 じやうじゆしよふ。ぜんごんこ。しよぶつ。ほうべんりき。
 『(45オ)
 お一ぶつぜう。ふんべつせつみ。しやりほつ。にやくがでし。
 じゐあらかん。ひやくしぶつしや。ふもんふち。しよぶつ
 によらい。たんけうけぼさつじ。しひふつでし。ひあら
 かん。ひひやくしぶつ。うしやりほつ。せしよびく。びくに。
 じゐいとくあらかん。せさいごしん。くきやうねはん。べん
 ぶぶし。ぐあのかたら。三みやく三ぼだい。たうちし 『(45ウ)
 はい。かいせぞうじやうまんにん。しよいしやが。にやくう
 びく。じつとくあらかん。にやくふしんしほう。むうぜ
 しよ。ぢよぶつめつどご。げんぜんむぶつ。しよいしやが。
 ぶつめつどご。によせとうきやう。じゆぢどくじゆ。げご
 ぎしや。ぜにんなんとく。にやくぐよぶつ。おしほうちう。
 べんとくけつりやう。しやりほつ。によとうたう。一しん『(46オ)
 しんげ。じゆぢぶつこ。しよぶつによらい。ごんふこまう。
 むうよぜう。ゆい一ぶつぜう。にじせそん。よくぢう

せんしぎ。にせつげごん。

△くびくに うゑぞうじやうまん うばそくが

まん うばいふしん によぜ四しゆとう ごしゆう

五千 ふじけんごくは おかいうけつろ ごしやく 『(46ウ)』

ごけし ぜせうちいじゆつ しゆぢうしさうかう

ぶつめとくこく しにんせんふくとく ふかんじゆぜ

ほう ししゆむしえう ゆいうしよでうじつ しや

りほつせんちやう しよぶつしよとくほう むりやう

はうべんりき にゐしゆじやうせつ しゆじやうしん

しよねんしゆぐしよぎやうだうにやくかんしよよく 『(47オ)』

しやう ぜんぜせんあくごう ぶつしつちぜい いしよ

えんひゆ ごんじはうべんりき りやういつさいくはん

ぎ わくせつしゆたら かだぎうほんじ ほんじやう

みぞうう やくせつおゐんえん ひゆびやうぎや

うばだいしやきやう どんごんげうせうほう とんぢやく

おしやうじ おしよむりやうぶつ ふぎやうじんめう 『(47ウ)』

だう しゆくしよなうらん めぜせつねはん

かせつぜはうべん りやうとくにうぶつゑ みぞう

せつによとう たうとくじやうぶつだう しよいみぞう

せつ せつじみしこ こんしやうぜごじ けつでう

せつだいぜう がしくぶほう ずいじゆんしゆしやう 『(48オ)』

せつ にうだいぜういほん いこせつぜきやう う

ぶつししんじやう にうなんやくりこん むりやう

しよぶつしよ にぎやうじんめうだう めししよぶつ

し せつぜだいぜうきやう がきによぜにん らいせ

じやうぶつだう いじんぐねんぶつ しゆぢじやう

かいこ しとうもんとくぶつ だいきじうへん

しん ぶつちひしんぎやう こゐせつだいぜう しやう 『(48ウ)』

もんにかくぼさつ もんがしよせつほう ないしお一

げ かいじやうぶつむぎ 十はうぶつどちう ゆいう

一ぜうほう む二やくむ三 ちよぶつはうべんせつ

たんいけみやうじ いんだうおしゆじやう せつぶつち

ゑこ しよぶつしゆつおせ ゆいし一じじつ よに

そくひしん じうふいせうぐ さいどおしゆじやう 『(49オ)』

ぶつじぢうだいぜう によごしよとくほう でうゑ

りきしやうごん いしどしゆじやう じせうむじやう

だう だいぜうべうどうほう にかくいせうぐけ ない

しお一にん がそくだけんどん しじゐふか にかく

にんしんきぶつ によらいふこわう やくむとん

しつゐ だんしよほうちうあく こぶつお十はう 『(49ウ)』

にどくむしよゐ がいさうごんしん くはうみやうせう

せけん むりやうしゆしよそん めせつじつさうゐん

しやりほつたうち がほんりつせいぐはん よくりやう一

さいしゆ によがとうむゐ によがしやくしよぐはん

こんしやいまんぞく け一さいしゆじやう かいりやうにう

ぶつだう にかくがぐしゆじやう じんけういぶつ 『(50オ)』

だう むちしやしやくらん めいわくふじゆけう

がちししゆじやう みぞうしゆぜんほん けんぢやくお

五よく ちあいこしやうなう いしよよくゐんえん

ついだ三あくだう りんゑ六しゆぢう びしゆしよく

ぞく じゆたいしみぎやう せゝじやうぞうちやう
 はくとくせうふくにん しゆくしよひつはく にうじや』(50ウ)
 けんちうりん にやくうにやくむとう ちしししよ
 けん ぐそく六十二 じんぢやくこまうほう けん
 じゆふかしや がまんじごんかう てんごくしんふ
 じつ おせんまんおくこう ふもんぶつみやうじ
 やくふもんしやうほう によぜにんなんと ぜこ
 しやりほつ があせつほうべん せつしよじんく
 だう じしいねはん がすいせつねはん ぜやく
 ひしんめつ しまほうじうほんらい じやうしじやく
 めつさう ぶつしぎやうだうい らいせとくさぶつ
 がうほうべんりき かいじさんぜうほう 一さいしよ
 せそん かいせつ一ぜうだう こんししよだいしゆ
 かいおうちよぎわく しまぶつごむる ゆいいつむ二 『(51ウ)
 ぜう くはこむしゆこう むりやうめつどぶつ 百千
 まんおくしゆ ごしゆふかりやう によぜしよせそん
 しゆくゝえんひゆ むしゆほうべんりき ちんぜつしよ
 ほつさう ぜしよせそんとう かいせつ一ぜうほう
 けむりやうしゆじやう りやうにうおぶつだう うしよ
 だいしやうじゆ ち一さいせけん てんにんぐんしやう』(52オ)
 るい じんしんししよよく きやういゐるはうべん
 じよけんだい一ぎ にかくうしゆじやうるい ちしよ
 くはこぶつ にかくもんほうふせ わくぢかいにん
 にく しやうじんせんちとう しゆくゝしゆふくとく によ
 ぜしよにんとう かいいじやうぶつだう しまぶつ

めつどい にかくいせんなんしん によぜしよしゆ 『(52ウ)
 じやう かいいじやうぶつだう しまぶつめつどい
 くやうしやりしや きまんおくしゆたう こんく
 ぎうはり しよこよめなう まいゑるりじゆ
 しやうくゝくほうごんじき しやうけうおしよとう わく
 うきしやくめう せんだんぎうぢんすい もくみつ
 びやうよざい せんぐはていどとう にかくおくほう 『(53オ)
 やちう しやくどじやうぶつめう ないしどうじげ
 じゆしやいぶつたう によぜしよにんとう かいい
 じやうぶつだう にかくにんいぶつここんりうしよ
 ぎやうそう こくてうじやうしゆさう かいいじやうぶつ
 だう わくい七ほうじやう ちうじやくしやくびやく
 どう びやくらうぎうゑんじやく てつもくぎうよ 『(53ウ)
 でい わくいけうしつふ ごんじきさぶつさう によぜ
 しよにんとう かいいじやうぶつだう さいゑさぶつ
 さう 百ふくしやうごんさう じさにやくしにん
 かいいじやうぶつだう ないしどうじげ にかくさう
 もくぎうひつ わくいしさうかう ちんぜつさう
 ざう によぜしよにんとう せんくゝしやくくとく 『(54オ)
 ぐそくだいひしん かいいじやうぶつだう たんけしよ
 ぼさつ どだつむりやうしゆ にかくにんおたうめう
 ほうざうぎうゑざう いけかうばんがい きやうしんに
 くやう にかくしにんさがく きやくくすいかくばい
 せうちやくきんくこ びはねうとうばつ によぜしゆめう
 をん じんちいくやう わくいくはんぎしん かばい 『(54ウ)

じゆぶつとく ないし一せうをん かいじやうぶつ
 だう にかくにんさんらんしん ないしい一げ くやう
 おゑぎう ぜんけんむしゆぶつ わくうにんらい
 はい わくぶたんがつしやう ないし一しゆ わくぶ
 せうていづ いしくやうぎう ぜんけんむりやうふつ
 じじやうむじやうだう くほうどむしゆく とうむよ『(55オ)
 ねはん によしんくくはめつにやくにんさんらん
 しん とうおたうめうちう 一せうなむぶつ かい
 いじやうぶつだう おしよくはこぶつ げんざいわく
 めつご にかくうもんぜほう かいじやうぶつだう
 みらいしよせそん ごしゆむうりやう ぜしよによ
 らいとう やくはうべんせつほう 一さいしよによ 『(55ウ)
 らい いむりやうはうべん どだつしよしゆじやう
 とうぶつむろち にかくうもんぼうしや む一ふ
 じやうぶつ しょぶつほんせいぐはん がしよぎやう
 ぶつだう ふよくりやうしゆじやう やくどうとく
 しだう みらいせしよぶつ すいせつ百千おく
 むしゆしよほうもん ごじつゐ一ぜう しょぶつ 『(56オ)
 りやうそくそん ちほうじやうむしやう ぶつしゆじう
 ゑんぎ ぜこせつ一ぜう ぜほうぢうほうゐ せけん
 さうじやうぢう おだうぢやうちい だうしほうべんせつ
 てんにんしよくやう げんざい十ほうぶつ ごしゆによ
 ごうじや しゆつげんおせけん あんをんしゆじやうこ
 やくせつによせほう ちだい一じやくめつ いはう 『(56ウ)
 べんりきこ すいじしゆくくだう ごじつゐぶつ

ぜう ちしゆじやうしよぎやうじんくくししよねん
 くはこしよしゆうごう よくしやうくくじんりき ぎつ
 しよこんりどん いしゆくくゑんえん ひゆやくごん
 じ ずいおうほうべんせつ こんがやくによせ あん
 をんしゆじやうこ いしゆくくほうもん せんじおぶつ『(57オ)
 だう がいちゑりき ちしゆじやうくよく ほう
 べんせつしよほう かいりやうとくくはんぎ しやり
 ほつたうち がいぶつげんくはん けん六だうしゆ
 じやう びんぐうむぶくゑ とうしやうじけんだう
 さうぞくくふだん じんぢやくお五よく によめうご
 あいび いとんあいじへい まうみやうむしよけん 『(57ウ)
 ふぐたいせいぶつ ぎうよだんくほう じんとう
 しよじやけん いくよくしやり めせしゆしやう
 ご にきだいひしん がしぎだうぢやう くはんじゆ
 やくきやうく お三七にちぢう しゆいによせ
 じ がしよとくちゑ みめうさいだい一 しゆじやう
 しよこんどん じやくらくちしよまう によしし 『(58オ)
 とうるい うんがにかど にじしよほんわう ぎつ
 しよてんたいしやく ごせ四てんわう ぎうだいじ
 ざいてん びやうよしよてんしゆ けんぞく百千まん
 くぎやうがつしやうらい しやうがてんほうりん がそく
 じしゆい にかくたんさんぶつぜう しゆじやうもつ
 ざいく ふのうしんぜほう はほうふしんこ ついお 『(58ウ)
 三あくだう がねうふせつほう しつにうおねはん
 じんねんくはこぶつ しよぎやうほうべんりき がこん

しょとくだう やくおうせつさんぜう さぜしゆい
 じ 十はうぶつかいげん ほんをんゐゆが ぜんざい
 しゃかもん だい一しだうし とくぜむじやうほう
 ずいしよ一さいぶつ によはうべんりき がとうやく『(59オ)
 かいとく さいめうだい一ほう ゐしよしゆじやう
 るい ふんべつせつ三ぜう せうちげうせうぼう
 ふじしんさぶつ ぜこいはうべん ふんべつせつしよ
 くは すいぶせつさんぜう たんいけうぼさつ しゃ
 りほつたうち がもんしやうしし じんじやうみめう
 をん きせうなむぶつ ふさによぜねん がしゆつ 『(59ウ)
 ちよくあくせ によしよぶつしよせつ がやくずい
 じゆんぎやう しゆいぜしい そくしゆはらない
 しよほうじやくめつさう ふかいごんせん いはうべん
 りきこ ゐごびくせつ ぜみやうてんほうりん
 べんうねはんをん ぎういあらかん ほうそうしや
 べつみやう じうくをんこうらい さんじねはん 『(60オ)
 はう しゃうじくやうじん がしやうによせせつ しゃ
 りほつたうち かげんぶつしとう しぐぶつだうしや
 むりやう千まんおく げんいくぎやうしん かいらい
 しぶつしよ そうじうしよぶつもん ほうべんしよ
 せつほう がそくさぜねん によらいしよいしゆつ
 ゐせつぶつゑこ こんしやうぜごじ しゃりほつ 『(60ウ)
 たうち どんごんせううちにん ちやくさうけうまん
 しゃ ふのうしんぜほう こんがきむゐ おしよ
 ぼさつちう しゃうぢきしやはうべん たんせつむじやう

だう ぼさつもんぜほう ぎまうかいいちよ 千二百
 らかん しつやくたうさぶつ によさんぜしよ
 ぶつ せつほうしぎしき がこんやくによぜ
 せつむふんべつほう しよぶつこうしゆつせ けん
 をんちぐなん しゃうししゆつうせ せつぜほう
 ぶなん むりやうむしゆこう もんぜほう やく
 なん のうちやうぜほうしや しにんやくぶなん
 ひにようどんげ 一さいかいあいげう てんにん
 しよけう じじない一じゆつ もんぼうくはん
 ぎさん ないしほつ一ごん そくいゐくやう
 いつさいさんぜぶつ せにんじんけう くはお
 うどんげ によともつうぎ がゐしよ
 ほうわう ふがうしよだいしゆ たんいいち
 ぜうだう けうけしよぼさつ むしやう
 もんでし によとうしやりほつ しゃうもん
 ぎうぼさつ たうちぜめうほう しよ 『(61オ)
 ぶつしひよう い五ぢよくあくせ たんげう
 ちやくしよよく によせとうしゆぢやう じう
 ふぐぶつだう たうらいせあくにん もん
 ぶつせついちぜう めいわくふしんじゆ
 はほうだあくだう うざんきしやうく し
 ぐぶつだうしや たうゐによせとう 『(61ウ)
 くはうさん一ぜうだう しゃりほつたうち しよ
 ぶつほうによぜ いまんおくはうべん ずい
 ぎにせつほう ごふしうかぐしや ふのうけう

れうし によとうぎいち しよぶつせしし
ずいぎはうべんじ むぶしよぎわく しんしやう
だいくはんぎ じちたうさぶつ

『(63オ)』

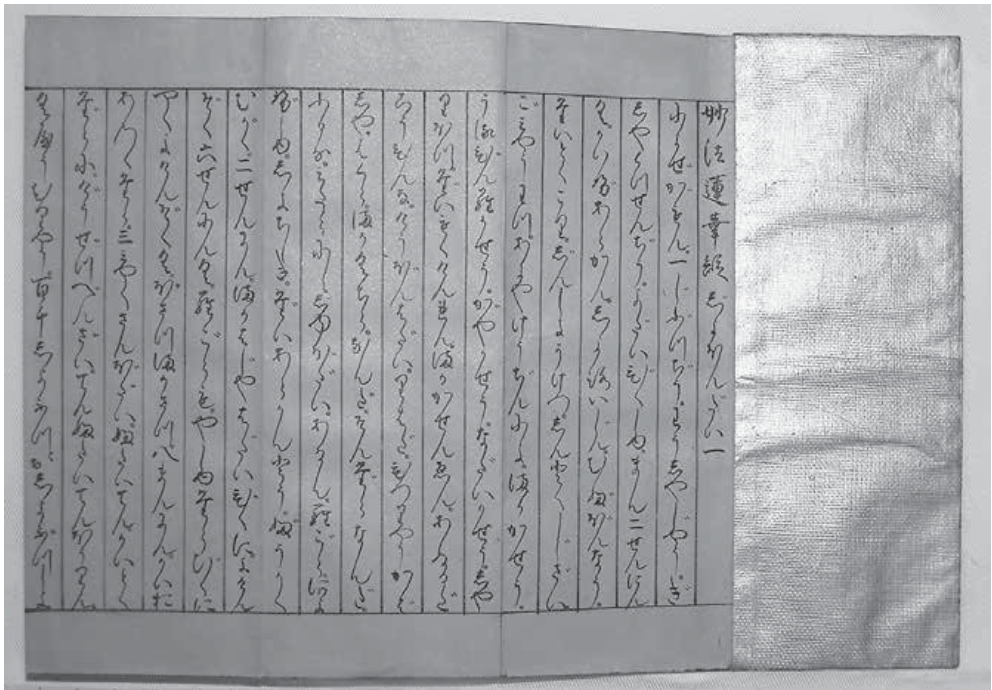
妙法蓮華経卷第一終

『(63ウ)』

【写真1】第二冊 表紙



【写真2】第一冊冒頭



(35)



【写真3】外箱